富田林市埋蔵文化財調査報告書22

# 平成４年度

# 富田林市内遺跡群発掘調査概要

1993．3

富田林市教育委員会

# はじめに

富田林市内における遺跡数も近年の開発等による事前調査や試掘調査によって新たな発見をみ、160カ所を越えるものとなりました。本市は、市内の中心を流れる石川とともに育まれてきたと言っても過言ではありません。石川によって形成された平坦地には、旧石器時代から近世に至る先人の痕跡が残されています。

本書は、平成4年度国庫補助事業として、市内に所在する遺跡の調査成果を報告するものです。

最後になりましたが、調査にあたり参加、ご協力を賜りました方々に厚く感謝申し上げます。

平成5年3月

富田林市教育委員会

教育長　西尾典次

# 例　　言

1．本書は、富田林市教育委員会が平成４年度に、国庫および府費の補助を受け、実施した緊急調査発掘調査の概要報告書である。

2．調査は、富田林市教育委員会社会教育課、中辻亘・今西淳・田川友美を担当者とし、平成４年７月９日に着手し、平成５年３月31日に終了した。

3．本書の執筆は、各々文末に記すものがあたった。本書の編集は、中辻が行い、製図については、田川が行い、錦織遺跡については、粟田薫女史の援助を得た。

発掘調査参加者

〈調　査　員〉　楠木理恵・中野篤史・廣野知子

〈調査補助員〉　川合和代・頃安敏雄・頓宮貴美恵・長尾圭・中塚正敏

〈作　業　員〉　岩井節子・岡上巴和・小田信代・坂本竹男・田中山次・土井正光・中川正博・成山貞逸・西澤寿子・原田亮子・藤丸祐子・前田壮志・前野美智子・矢野早苗・山本節子

# 本　文　目　次

はじめに
例　　言
Ⅰ　平成４年度調査概要 …… 1
Ⅱ　甲田遺跡 …… 2
　ＫＤ９２－１ …… 2
　ＫＤ９２－２ …… 2
　ＫＤ９２－３ …… 5
　ＫＤ９２－４ …… 5
　ＫＤ９２－５ …… 6
　まとめ …… 6
Ⅲ　甲田南遺跡 …… 7
　ＫＤＳ９２－１ …… 7
　１．層　序 …… 9
　２．遺　構 …… 9
　３．遺　物 …… 13
　４．まとめ …… 21
Ⅳ　錦織遺跡 …… 22
　ＮＫ９２ …… 22
　１．層　序 …… 22
　２．遺　構 …… 24
　３．遺　物 …… 30
　４．まとめ …… 43

# 挿　図　目　次

挿図１　ＫＤ９２－１平面・断面図 …… 2
挿図２　甲田遺跡調査地位置図 …… 3
挿図３　ＫＤ９２－２平面・断面図 …… 4
挿図４　ＫＤ９２－３～５平面図 …… 5
挿図５　甲田南遺跡調査位置図 …… 8
挿図６　第１トレンチ平面図 …… 10
挿図７　第２トレンチ平面図 …… 11
挿図８　住居址１出土遺物 …… 15
挿図９　住居址１・包含層出土石器 …… 17
挿図10　土壙１・ピット８・９出土土器 …… 19
挿図11　包含層出土遺物 …… 20
挿図12　錦織遺跡調査地位置図 …… 23
挿図13　ＮＫ９２平面図 …… 25・26
挿図14　遺構出土遺物 …… 33
挿図15　遺構出土遺物 …… 37
挿図16　包含層出土遺物 …… 39
挿図17　その他の遺物 …… 41

# 表　目　次

表１　発掘届出件数 …… 1
表２　発掘調査一覧表 …… 1
表３　ＫＤ９２－３　ピット一覧表 …… 6
表４　ＫＤ９２－４　ピット一覧表 …… 6
表５　ＫＤ９２－５　ピット一覧表 …… 6
表６　第１トレンチ　土壙・ピット一覧表 …… 12
表７　第２トレンチ土壙・ピット一覧表 …… 13
表８　各遺構出土遺物一覧表 …… 14
表９　遺構一覧表 …… 27～29

# 図　版　目　次

図版１　（上）ＫＤ９２－１　調査区全景　南から
　　（下）ＫＤ９２－１　溝１西断面　東から
図版２　（上）ＫＤ９２－２　調査区全景　北東から
　　（下）ＫＤ９２－３　調査区全景　北から
図版３　（上）ＫＤ９２－４　調査区全景　北から
　　（下）ＫＤ９２－５　調査区全景　北から
図版４　（上）ＫＤ９２－２　土壙１出土土器
　　（下）ＫＤ９２－２　土壙１出土瓦
図版５　（上）ＫＤＳ９２－１　第１トレンチ全景　南から
　　（下）ＫＤＳ９２－１　第１トレンチ　ピット９遺物出土状況　北から
図版６　（上）ＫＤＳ９２－１　住居址１全景 南から
　　（下）ＫＤＳ９２－１　住居址１内柱穴１　東から
図版７　（上）ＫＤＳ９２－１　第２トレンチ東半部全景　東から
　　（下）ＫＤＳ９２－１　第２トレンチ西半部全景　東から
図版８　（上）ＫＤＳ９２－１　土壙１出土土器
　　（下）ＫＤＳ９２－１　住居址１・包含層出土遺物
図版９　（上）ＮＫ９２　調査区全景　南西から
　　（下）ＮＫ９２　調査区全景　北東から
図版10　（上）ＮＫ９２　トレンチ全景　東から
　　（下）ＮＫ９２　ピット１遺物出土状況　東から
図版11　（上）ＮＫ９２　ピット３遺物出土状況　東から
　　（下）ＮＫ９２　ピット４遺物出土状況　西から
図版12　（上）ＮＫ９２　ピット４遺物出土状況　西から
　　（下）ＮＫ９２　ピット２遺物出土状況　東から
図版13　（上）ＮＫ９２　包含層遺物出土状況　西から
　　（下）ＮＫ９２　塼出土状況　東から
図版14　ＮＫ９２　出土遺物（瓦器椀・皿）
図版15　ＮＫ９２　出土遺物（土師器皿Ａ・Ｂ）
図版16　（上）ＮＫ９２　ピット１出土土器（土師器皿Ａ）
　　（下）ＮＫ９２　ピット３出土土器（土師器皿Ａ）
図版17　（上）ＮＫ９２　ピット４出土土器（土師器皿Ａ）
　　（下）ＮＫ９２　出土遺物（羽釜・直刃削器・土錘・須恵器甕・塼）

# Ⅰ　平成４年度調査概要

| | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 発　掘 | 5 | 4 | 3 | 3 | 4 | 8 | 12 | 14 | 6 | 2 | 3 | 3 | 67 |
| 立　会 | 15 | 6 | 12 | 13 | 10 | 7 | 8 | 5 | 15 | 4 | 12 | 4 | 111 |
| 慎重工事 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 発見届 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 5 |
| 計 | 20 | 11 | 16 | 16 | 14 | 15 | 21 | 21 | 21 | 7 | 15 | 7 | 184 |

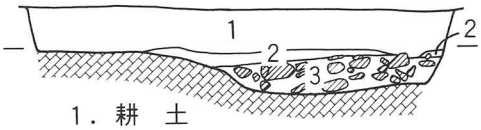
表１　発掘届出件数（平成５年３月15日まで）

| No. | 調査期間 | 遺跡名 | 位　置 | 申請者 | 規模 (m²) | 用　途 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 4．7．9～7.10 | 甲田遺跡 | 甲田456－2 | 山本　謙三 | 72.93 | 個人住宅 | 本書掲載 |
| 2 | 4．8.21～9．7 | 甲田南遺跡 | 甲田51外3筆 | 疋田　耕三 | 3,722 | 倉　庫 | 本書掲載 |
| 3 | 4．9.24～10．5 | 甲田遺跡 | 甲田456－2の一部 | 小泉　節 | 70.88 | 個人住宅 | 本書掲載 |
| 4 | 4.10.27～12.25 | 錦織遺跡 | 錦織415－2 | 藤本　多美 | 323.9 | 個人住宅 | 本書掲載 |
| 5 | 4.11．5～11．6 | 甲田遺跡 | 甲田456－7 | 笹本　一太 | 65.41 | 個人住宅 | 本書掲載 |
| 6 | 4.12.10 | 西板持遺跡 | 西板持町3丁目686－1 | 北所弥太郎 | 516.4 | 個人住宅 | 浄化層部分1×1.5mを機械掘削遺構・遺物なし |
| 7 | 4.12.18～12.25 | 錦織遺跡 | 錦織640－7 | 管野　義治 | 323.1 | 個人住宅 | 浄化層部分1.5×2mを人力掘削奈良時代の土壙を検出 |
| 8 | 5．1．6～1．7 | 甲田遺跡 | 甲田456－6 | 森田　孝志 | 59.11 | 個人住宅 | 本書掲載 |
| 9 | 5．1．8～1.11 | 甲田遺跡 | 甲田456－7 | 天野　薫美 | 60.11 | 個人住宅 | 本書掲載 |
| 10 | 5．2．1～2．3 | 西板持遺跡 | 西板持町7丁目791外2筆 | 北辻　弘 | 450.9 | 個人住宅 | 浄化層部分2×2mを人力掘削ピット・土壙を検出。遺物なし |
| 11 | 5．2.18～2.19 | 甲田南遺跡 | 甲田59－4 | 古川　眞一 | 195.9 | 個人住宅 | 浄化層部分1.5×2mを人力掘削溝・ピットを検出 |

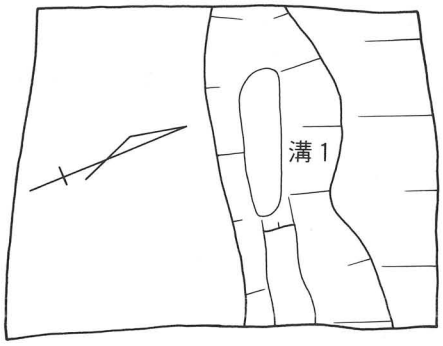
表２　発掘調査一覧表

# II 甲 田 遺 跡

甲田遺跡は、市域のほぼ中心に位置し、市内中央を流れる石川西岸の低位及び中位段丘上に広がっている。昭和46（1971）年から51（1976）年にかけて行った本市教育委員会の分布調査によって確認された遺跡である。その後の発掘調査によって、しだいに内容が明らかになってきており、弥生時代から中世に至る遺跡と考えられている。　（中辻）




1．耕　土
2．床　土（灰茶色混礫弱粘質土）
3．濁灰褐色混礫粘質土
（2～24cmの円礫含む）



挿図1　ＫＤ９２－１平面・断面図

ＫＤ９２－１

調 査 地：富田林市甲田４５６－２

調査面積：５㎡／72.93㎡

調査地は中位段丘の東縁にあって、近鉄長野線川西駅の北東方、旧国道170号線の東に位置する甲田集落の北部にあたり、養楽寺の北に接している。現況は水田である。

個人住宅建設に伴うもので、調査対象を浄化槽部分とし、２×2.5mの範囲を人力掘削により発掘調査を実施した。

地表面から20cmの厚さで耕土があり、直下が地山である。一部に灰茶色弱粘質土の床土が薄くみられる。

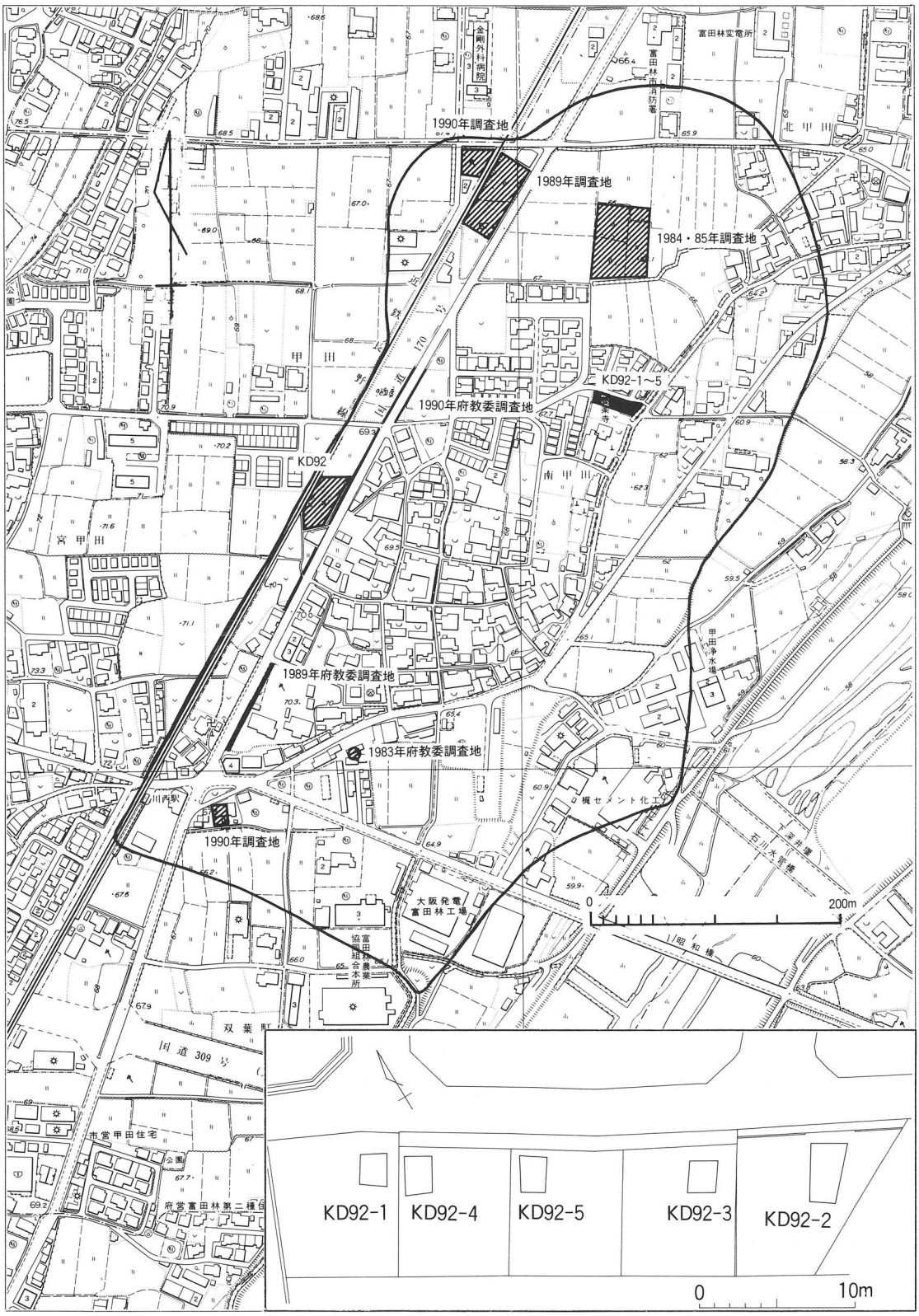
調査区の北半部で濁灰褐色粘質土に２～24cmの円礫を含む埋土をもつ溝を検出した。この溝は南北方向に延びると思われ、長さ180cm分を検出したのみで、南肩は確認したものの、北肩は調査区外のため、幅は不明である。深さは約15cmを測る。南肩に近いところではさらに深く落ち込んでおり、最も深いところでは約18cmの落差がある。

溝からは、羽釜・瓦器・丸瓦・平瓦が出土している。　（中辻）

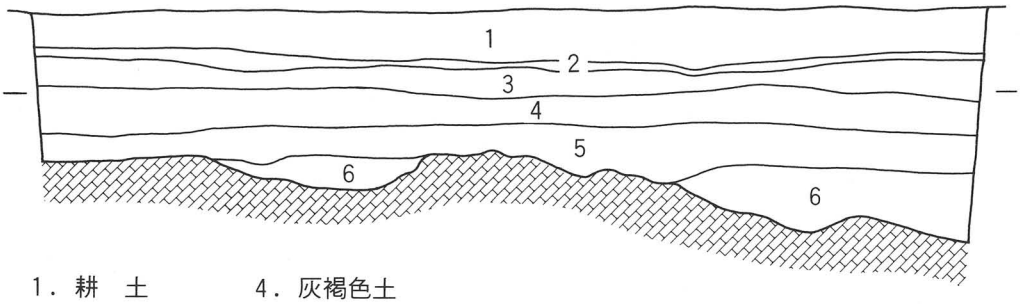
ＫＤ９２－２

調 査 地：富田林市甲田４５６－２の一部

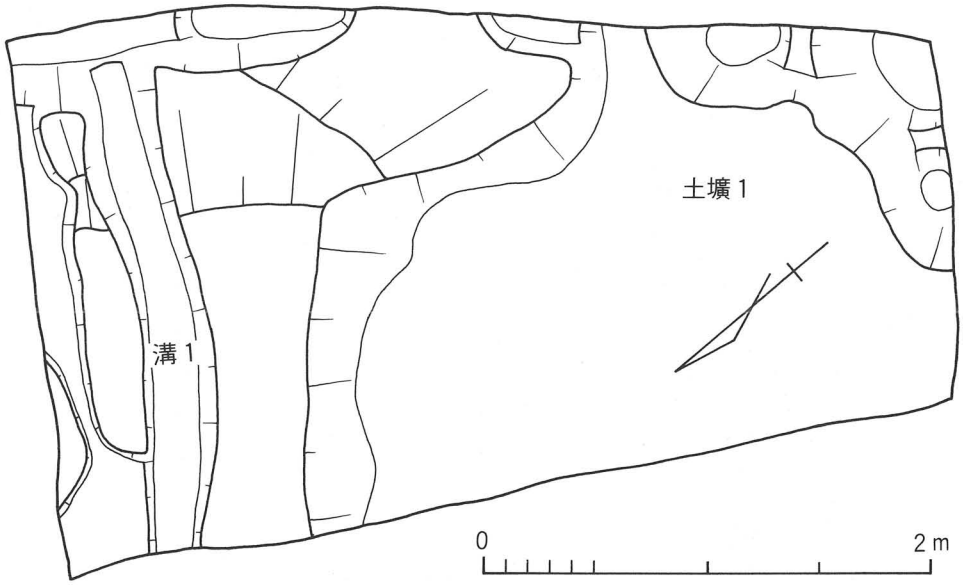
調査面積：８㎡／70.88㎡




挿図２　甲田遺跡調査位置図




1．耕　土　　4．灰褐色土
2．床　土　　5．灰褐色土上黄褐色粘質土がブロック状に混じる(円礫混入)
3．灰黄褐色土　　6．暗灰褐色弱粘質土礫混じり




挿図３　ＫＤ９２－２平面・断面図

調査区１（ＫＤ９２－１）のある水田の一角に位置する。

個人住宅建設に伴うもので、駐車場及び浄化槽部分を調査対象とし、２×４ｍの範囲を人力掘削により発掘調査を実施した。

地表面から65cmで地山が現れる。層序は、上から耕土（20cm）、床土（５cm）、灰黄褐色土（10cm）、灰褐色土（20cm）、黄灰色土がブロック状に混じる灰褐色土（10cm）の順である。

遺構には溝と土壙がある。溝は東西方向のもので、調査区の北端で長さ240cm分を検出した。東では分岐しており、約20cmの間隔で平行に延びる。南の溝は深く、深さ20cm、幅約20cmを測り、土壙に流れ込む格好になっている。溝からは瓦器・平瓦・丸瓦が出土している。土壙は溝の南から東に曲がり、底には礫混じりの暗灰褐色弱粘質土の埋土をもつ落ち込みがみられる。南側での深さは約40cmあり、落ち込みは最も深いところで約25cmある。土壙からは須恵器・土師質の小皿・瓦器・瓦質の羽釜、甕、摺鉢が出土している。　（今西）

ＫＤ９２－３

調 査 地：富田林市甲田４５６－７

調査面積：４㎡／65.41㎡

調査区２（ＫＤ９２－２）の西側に位置する。

個人住宅建設に伴うもので、浄化槽部分を調査対象とし、２×２ｍの範囲を人力掘削により発掘調査を実施した。

層序は、耕土（20 cm）、床土（５cm）、灰褐色土（４～８cm）の順である。第３層については、調査区の北と東にのみ認められる。これは地形が北東に傾斜している関係と思われる。

検出した遺構は、ピット５である。それぞれのピットについては表３を参照されたい。

（今西）

ＫＤ９２－４

調 査 地：富田林市甲田４５６－６

調査面積：4.5㎡／59.11㎡

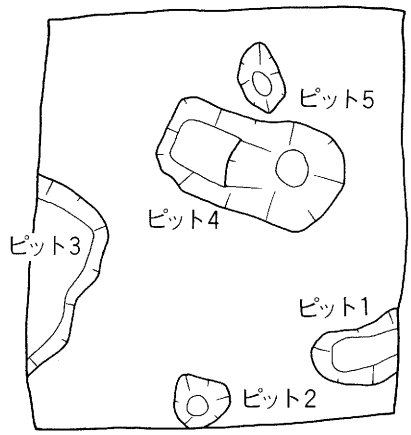
調査区１（ＫＤ９２－１）の東側に位置する。

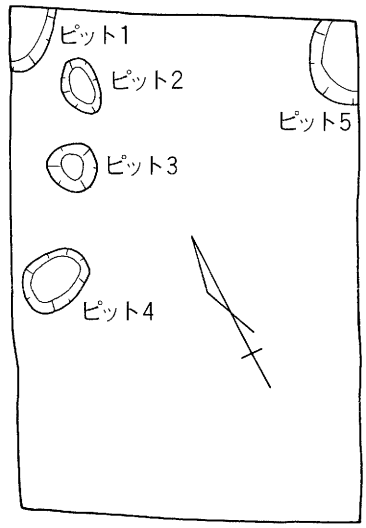
個人住宅建設に伴うもので、浄化槽部分を調査対象とし、1.8×2.5mの範囲を人力掘削により発掘調査を実施した。

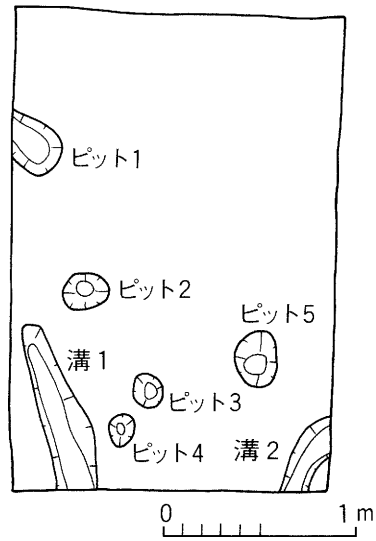
厚さ20 cmの耕土直下、黄褐色砂礫の地山である。

検出した遺構は、ピット５である。それぞれのピットについては表４を参照されたい。

（今西）




挿図４　ＫＤ９２－３・４・５平面図

ＫＤ９２－５

調 査 地：富田林市甲田４５６－７

調査面積：４㎡／60.11㎡

調査区４（ＫＤ９２－４）の西側に位置する。

個人住宅建設に伴うもので、浄化槽部分を調査対象とし、２×２ｍの範囲を人力掘削により発掘調査を実施した。

層序は、耕土（20cm）、床土（３cm）、灰褐色土（５cm）の順である。

検出した遺構は溝２、ピット５である。溝１は南北方向に延びるもので、長さ90cm分を検出した。調査区の南西端にあって、幅は最も広いところで25cm、深さは５cmを測る。埋土は灰褐色土である。ピットについては表５を参照されたい。

遺物については、認められなかった。（今西）

## まとめ

今回の調査地は、甲田遺跡の北東部、中位段丘の東縁にあたる。遺構の内容はいずれも中世、室町期のもので、瓦を出土することから、寺院などの建物があったと推測される。調査地のすぐ南には「養楽寺」があり、この寺の寺域が広かったことを思わせる。甲田遺跡における過去の調査をみると、現在の甲田集落が立地する旧国道170号線から以東の中位段丘面では中世の遺構が確認されている。遺跡の北端では、古墳時代と思われる遺構も検出されており、甲田（向田）の地名が「日本書紀」に記され、渡来人が住

| 番　号 | 平面形 | 規　模（m） | 深さ(m) | 土色・土質 | 遺　物 |
|---|---|---|---|---|---|
| ピット１ | 不整形 | (0.45)× 0.32 | 0.185 | 濁灰褐色混礫土 | 土師器 |
| 2 | 不整形 | 0.29 × 0.32 | 0.07 | 濁灰褐色混礫土 | |
| 3 | 不整形 | (1.09)×(0.4) | 0.115 | 灰褐色土 | |
| 4 | 不整形 | 0.95 × 0.55 | 0.145 | 濁灰褐色混礫土 | |
| 5 | 不整形 | 0.38 × 0.23 | 0.045 | 濁灰褐色混礫土 | |

表３　ＫＤ９２－３ピット一覧表

| 番　号 | 平面形 | 規　模（m） | 深さ(m) | 土色・土質 | 遺　物 |
|---|---|---|---|---|---|
| ピット１ | 不整形 | (0.35)×(0.25) | 0.025 | 灰褐色土 | |
| 2 | 楕円形 | 0.31 ×(0.2) | 0.05 | 灰褐色土 | |
| 3 | 円　形 | 0.26 × 0.26 | 0.08 | 灰褐色土 | |
| 4 | 隅丸方形 | 0.38 × 0.28 | 0.045 | 灰褐色土 | |
| 5 | 不整形 | (0.45)×(0.26) | 0.045 | 灰褐色土 | |

表４　ＫＤ９２－４ピット一覧表

| 番　号 | 平面形 | 規　模（m） | 深さ(m) | 土色・土質 | 遺　物 |
|---|---|---|---|---|---|
| ピット１ | 不整形 | (0.3)× 0.3 | 0.05 | 灰褐色土 | |
| 2 | 不整形 | 0.24 × 0.2 | 0.05 | 灰褐色土 | |
| 3 | 楕円形 | 0.2 × 0.16 | 0.035 | 灰褐色土 | |
| 4 | 楕円形 | 0.18 × 0.13 | 0.05 | 灰褐色土 | |
| 5 | 楕円形 | 0.3 × 0.2 | 0.05 | 灰褐色土 | |

表５　ＫＤ９２－５ピット一覧表

んだ地であると言われていることと関連して興味深い。また、遺跡東半の低位段丘面では、奈良時代の遺物が出土している。

今回の調査で、遺跡の西半部において、比較的広範囲に中世遺構が存在することが明らかとなったことの意義は大きい。（中辻）

# Ⅲ　甲田南遺跡

甲田南遺跡は、昭和50(1975)年に遺跡のほぼ中央を東西に走る国道309号線（大阪千早線）予定地内において、都市下水路築造工事の際に発見されました。その後、昭和55～59（1980～1984）年にかけて国道309号線築造工事に伴う本格的な発掘調査が大阪府教育委員会によって実施されてきました。その結果、縄文時代から中世にかけての遺構が検出され、なかでも弥生時代中期の竪穴住居址群が広範囲にわたって存在することが判明しました。また、昭和63（1988）年に富田林市教育委員会によって行った調査では、旧国道170号線より西側に奈良時代の遺構がひろがることや平成４（1992）年の市営住宅建て替え工事に伴う調査では国道309号線より南側には古墳時代から中世の遺構がひろがることが判明しました。

この遺跡周辺の地形は、石川と羽曳野丘陵との間に中位・低位の段丘が、それぞれ４～７ｍの段丘崖を作って連なっており、甲田南遺跡は、石川に接する低位段丘上に位置しています。

（田川）

ＫＤＳ９２－１

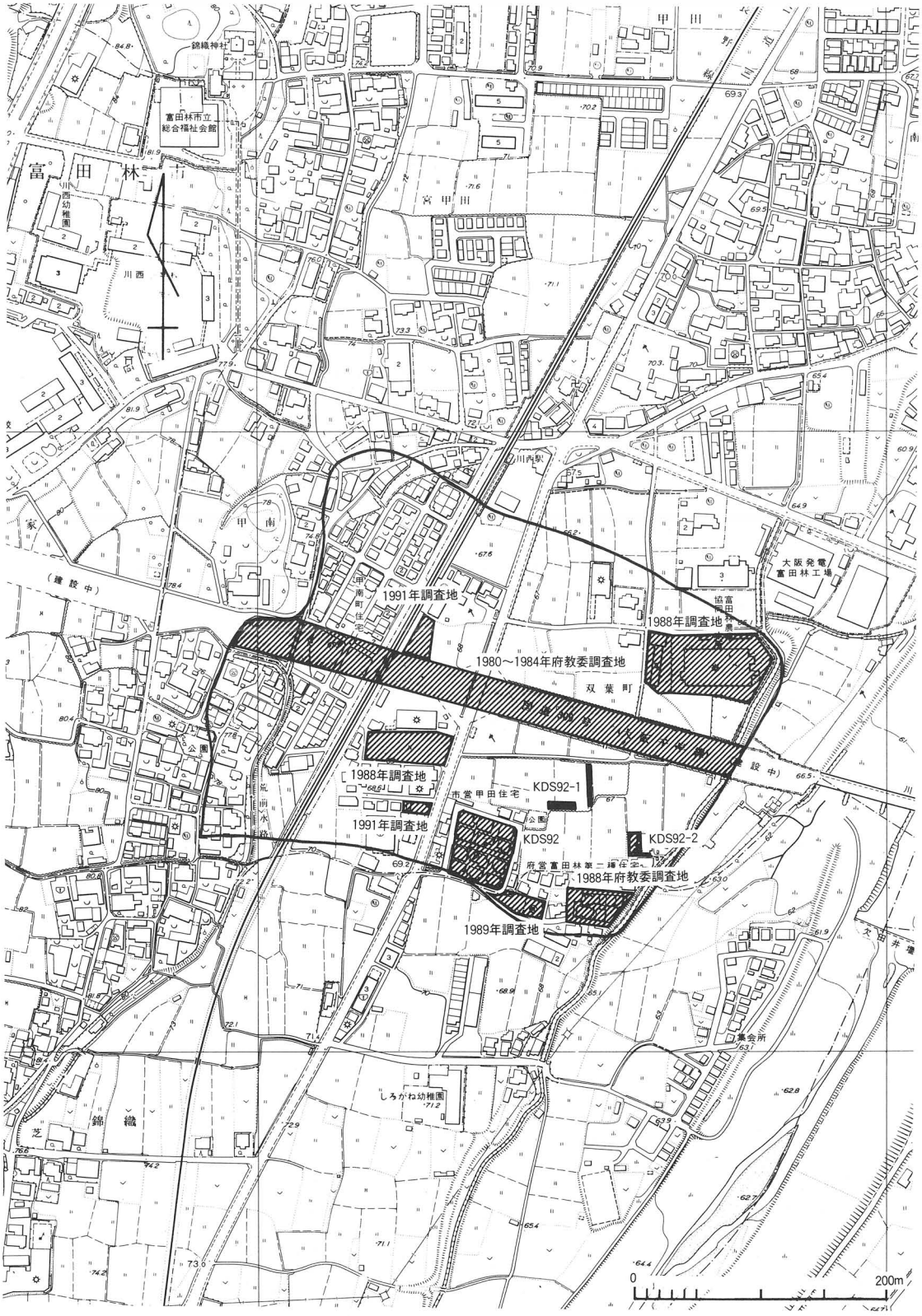
調 査 地：富田林市甲田５１外３筆

調査面積：42.81㎡／3,722㎡

今回の調査地は、甲田南遺跡の西端に位置している。平成４年５月12日に、埋蔵文化財発掘届出書が富田林市教育委員会社会教育課に提出され、倉庫の建設が計画されており、協議の結果、壅壁部分と浄化槽部分について発掘調査を実施することとなった。

調査は、調査区の東側に南北約35m、東西約1.8mの第１トレンチ、南側に南北約４ｍ、東西約27mの第２トレンチを設定し、平成４年８月１日から９月７日まで現地調査を行った。

（田川）




挿図５　甲田南遺跡調査位置図

## 1．層　序

第１トレンチは、上から順に耕土（約20cm）、床土（約６cm）、濁黄灰色土（約４cm）、黄褐色弱粘質土（約６cm）、マンガンを含む灰褐色土（約10cm）がほぼ水平に堆積する。

第２トレンチの東側は、第１トレンチと同様の堆積状況を示すが、西側約1/3では、現在の水田面が１段高くなっており、上から順に耕土（約20cm）、床土（約５cm）、黄褐色土と灰黄色土がブロック状に混じる褐灰色土（約16cm）、灰褐色土（約10cm）、濁黄灰色土（約12cm）、黄褐色弱粘質土（約４cm）、褐灰色混礫土（約10cm）が堆積する。第３・４層は、水田化されたときに客土されたものと推定される。（田川）

## 2．遺　構

### 第１トレンチ

住居址１、溝４、土壙２、ピット15を検出した。

#### 住居址

竪穴住居址１棟を検出した。

#### 住居址１

平面形が円形の住居最大幅7.62m分を検出した。南側で壁溝、長さ1.31m、幅36cmを検出した。床面では、２カ所柱穴を確認した。柱穴１、大きさ１×0.96m、深さ0.63mの不整形なものである。柱穴２、大きさ0.52×0.18m分を検出し、大半が調査区外にあるため深さ・形状は不明である。柱間は、2.6mを測る。

#### 溝

溝を４条検出した。

#### 溝１

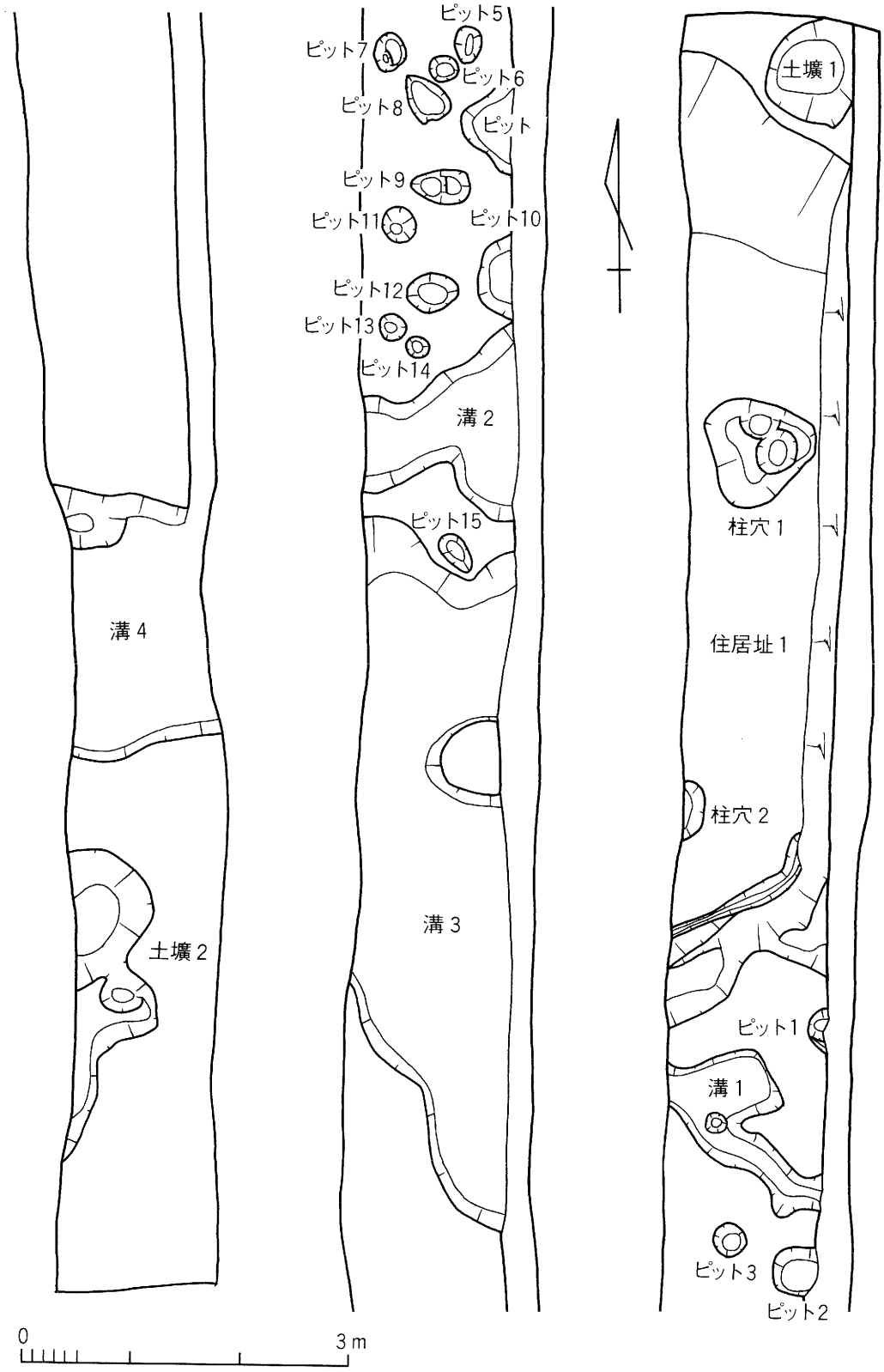
北西から南東に流れる溝である。長さ1.77m分を検出した。幅は1.06m、深さは0.26mを測る。埋土は濁灰褐色土である。

#### 溝２

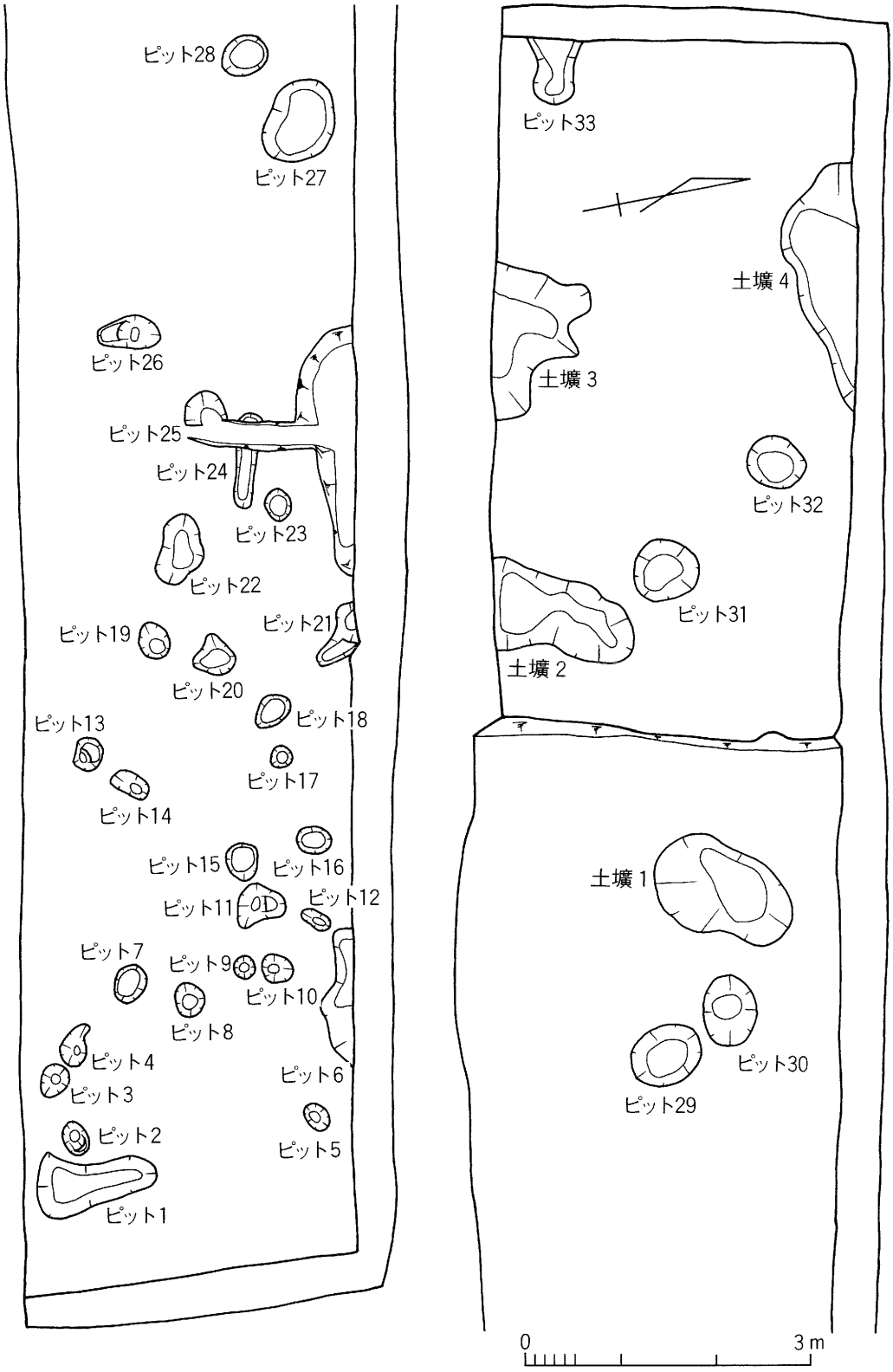
南西から北東に流れる溝、長さ1.36m分を検出した。幅は1.85m、深さは0.06mを測る。埋土は、灰褐色混礫土である。

#### 溝３

西から東に流れ東側で２方向に分岐する溝、長さ1.52m分を検出した。幅は最も広いところで4.99m、北側支流は幅1.16m、南側支流は幅４m、深さは0.2mを測る。埋土は、灰褐色混礫土




挿図 6　第 1 トレンチ平面図




挿図 7　第 2 トレンチ平面図

| 種　別 | 平面形 | 規　模（m） | 深さ(m) | 土　色・土　質 | 遺　物 |
|---|---|---|---|---|---|
| 土　壙1 | 不 整 形 | (1.0) × 0.81 | 0.16 | 灰褐色粘質土に黒灰色粘質土がブロック状に混じる | 弥生土器 |
| 2 | 不 整 形 | 2.72 ×(0.75) | 0.445 | 暗褐色混礫弱粘質土 | |
| ピット1 | 不 整 形 | 0.41 ×(0.29) | 0.155 | 褐灰色土 | 弥生土器 |
| 2 | 不 整 形 | 0.45 ×(0.41) | 0.125 | 褐灰色土 | |
| 3 | 円　　形 | 0.31 × 0.31 | 0.265 | 褐灰色土 | 弥生土器 |
| 4 | 不 整 形 | 0.94 ×(0.46) | 0.095 | 褐灰色土 | 土師器 |
| 5 | 楕 円 形 | 0.34 × 0.24 | 0.07 | 濁灰褐色土 | |
| 6 | 隅丸方形 | 0.28 × 0.25 | 0.055 | 濁灰褐色土 | |
| 7 | 不 整 形 | 0.36 × 0.32 | 0.19 | 褐灰色土 | 弥生土器 |
| 8 | 不 整 形 | 0.51 × 0.35 | 0.1 | 褐灰色土 | 土師器 |
| 9 | 不 整 形 | 0.53 × 0.32 | 0.285 | 褐灰色土 | 弥生土器　土師器 |
| 10 | 不 整 形 | 0.80 ×(0.3) | 0.04 | 濁灰褐色土 | |
| 11 | 隅丸方形 | 0.33 × 0.32 | 0.13 | 濁灰褐色土 | |
| 12 | 不 整 形 | 0.47 × 0.36 | 0.09 | 濁灰褐色土 | |
| 13 | 隅丸方形 | 0.25 × 0.24 | 0.09 | 濁灰褐色土 | 弥生土器 |
| 14 | 隅丸方形 | 0.21 × 0.19 | 0.08 | 濁灰褐色土 | |
| 15 | 不 整 形 | 0.40 × 0.23 | 0.19 | 濁灰褐色土 | |

表6　第1トレンチ　土壙・ピット一覧表

である。

### 溝4

西から東に流れる溝、長さ1.36m分を検出した。幅は2.46m、深さは0.19mを測る。埋土は、灰褐色混礫土である。

### 土壙

土壙2を検出した。規模等については、表6を参照されたい。

### ピット

ピット15を検出した。規模等については、表6を参照されたい。

## 第2トレンチ

土壙4、ピット33を検出した。

### 土壙

土壙4を検出した。規模等については、表7を参照されたい。

### ピット

ピット33を検出した。規模等については、表7を参照されたい。

| 種　別 | 平面形 | 規　模（m） | 深さ(m) | 土　色・土　質 | 遺　物 |
|---|---|---|---|---|---|
| 土　壙1 | 不整形 | 1.54 × 0.96 | 0.235 | 暗灰褐色混礫土 | |
| 2 | 不整形 | 1.57 × 0.92 | 0.535 | 暗褐色混礫粘質土 | |
| 3 | 不整形 | 1.68 ×(0.99) | 0.225 | 暗灰褐色混礫土 | |
| 4 | 不整形 | 2.62 ×(0.8) | 0.2 | 暗灰褐色混礫土 | |
| ピット1 | 不整形 | 1.28 × 0.74 | 0.135 | 濁灰黄色土（マンガンを含む） | |
| 2 | 楕円形 | 0.34 × 0.26 | 0.175 | 濁灰黄色土 | |
| 3 | 楕円形 | 0.37 × 0.3 | 0.195 | 濁灰黄色土 | |
| 4 | 不整形 | 0.46 × 0.29 | 0.165 | 濁灰黄色土 | |
| 5 | 楕円形 | 0.31 × 0.24 | 0.18 | 濁黄灰色土 | |
| 6 | 不整形 | 1.47 ×(0.35) | 0.16 | 濁黄灰色土 | |
| 7 | 楕円形 | 0.41 × 0.34 | 0.18 | 濁灰黄色土 | |
| 8 | 楕円形 | 0.36 × 0.32 | 0.045 | 濁灰黄色土 | |
| 9 | 円　形 | 0.24 × 0.24 | 0.055 | 濁灰黄色土 | |
| 10 | 楕円形 | 0.36 × 0.3 | 0.1 | 濁灰黄色土 | |
| 11 | 不整形 | 0.50 × 0.48 | 0.29 | 濁灰黄色土 | |
| 12 | 楕円形 | 0.33 × 0.16 | 0.145 | 濁黄灰色土 | |
| 13 | 不整形 | 0.36 × 0.31 | 0.15 | 濁灰黄色土 | |
| 14 | 不整形 | 0.39 × 0.21 | 0.125 | 濁灰黄色土 | |
| 15 | 楕円形 | 0.40 × 0.34 | 0.025 | 濁灰黄色土 | |
| 16 | 楕円形 | 0.36 × 0.28 | 0.04 | 濁灰黄色土（マンガンを含む） | |
| 17 | 楕円形 | 0.49 × 0.31 | 0.25 | 濁灰黄色土 | 土師器 |
| 18 | 不整形 | 0.44 × 0.42 | 0.045 | 黄灰色土（マンガンを含む） | |
| 19 | 円　形 | 0.23 × 0.24 | 0.03 | 黄灰色土 | |
| 20 | 不整形 | 0.43 × 0.31 | 0.025 | 黄灰色土 | |
| 21 | 不整形 | 0.59 ×(0.36) | 0.17 | 黄灰色土 | |
| 22 | 不整形 | 0.74 × 0.43 | 0.125 | 濁黄灰色土 | |
| 23 | 楕円形 | 0.35 × 0.29 | 0.05 | 黄灰色土 | |
| 24 | 不整形 | 1.00 × 0.27 | 0.11 | 黄灰色土 | |
| 25 | 円　形 | 0.45 × 0.48 | 0.135 | 濁灰黄色土 | |
| 26 | 不整形 | 0.67 × 0.37 | 0.135 | 濁灰黄色土 | |
| 27 | 不整形 | 0.91 × 0.66 | 0.14 | 濁灰黄色土 | 弥生土器 |
| 28 | 楕円形 | 0.50 × 0.41 | 0.06 | 濁灰黄色土 | |
| 29 | 楕円形 | 0.78 × 0.63 | 0.13 | 濁灰黄色土 | |
| 30 | 楕円形 | 0.72 × 0.56 | 0.08 | 濁灰黄色土 | |
| 31 | 不整形 | 0.67 × 0.66 | 0.155 | 暗灰褐色混礫土 | |
| 32 | 楕円形 | 0.60 × 0.53 | 0.135 | 暗灰褐色混礫土 | |
| 33 | 不整形 | (0.69)× 0.57 | 0.105 | 暗灰褐色混礫土 | |

表7　第2トレンチ　土壙・ピット一覧表

## 3．遺　物

今回の調査では、トレンチ調査ということもあり遺物の出土量は少ない。出土遺物には、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・土師質土器・瓦質土器・磁器などの容器類のほか瓦・石器・サヌカイトなどがある。遺物のほとんどは第1トレンチより出土している。以下、トレンチごとに出土遺物を概観したのち、主な遺物について観察を加える。

### 第1トレンチ（挿図9～11　図版8）

各遺構からの遺物出土状況は表8のとおりである。その大半は、住居址1と土壙1から出土した弥生土器である。他の遺構のものは、弥生土器と土師器があるが多くが砕片である。包含層では、第5層から弥生土器・土師器や石器の他、黒色土器や瓦器などの中世遺物が出土して

| 遺構＼遺物 | 縄文土器 | 弥生土器 | 土師器 | 須恵器 | 黒色土器 | 瓦器 | 土師質土器 | 須恵質土器 | 瓦質土器 | 陶器 | 磁器 | 瓦 | 石器 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 住居址 1 | ○ | ○ | | | | | | | | | | | ○ | サヌカイト |
| 溝 1 | | ○ | | | | | | | | | | | | |
| 土 壙 1 | | ○ | | | | | | | | | | | | |
| ピット 1 | | ○ | | | | | | | | | | | | |
| ピット 3 | | ○ | | | | | | | | | | | | |
| ピット 4 | | | ○ | | | | | | | | | | | |
| ピット 7 | | | ○ | | | | | | | | | | | |
| ピット 8 | | ○ | | | | | | | | | | | | |
| ピット 9 | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | |
| ピット 10 | | ○ | | | | | | | | | | | | |

**表８　各遺構出土遺物一覧表**

いる。また、第３・４層からは、弥生土器・土師器・黒色土器・瓦器や石器の他、伊万里焼など近世遺物が出土している。

**住居址１**（挿図８・９　図版８）

縄文土器・弥生土器・石器・サヌカイトの剝片が住居の埋土中より出土している。また、柱穴１より弥生土器（挿図８－７）が出土している。

**縄文土器**

破片であるが１点ある。内面に黒色物質が塗布されている。

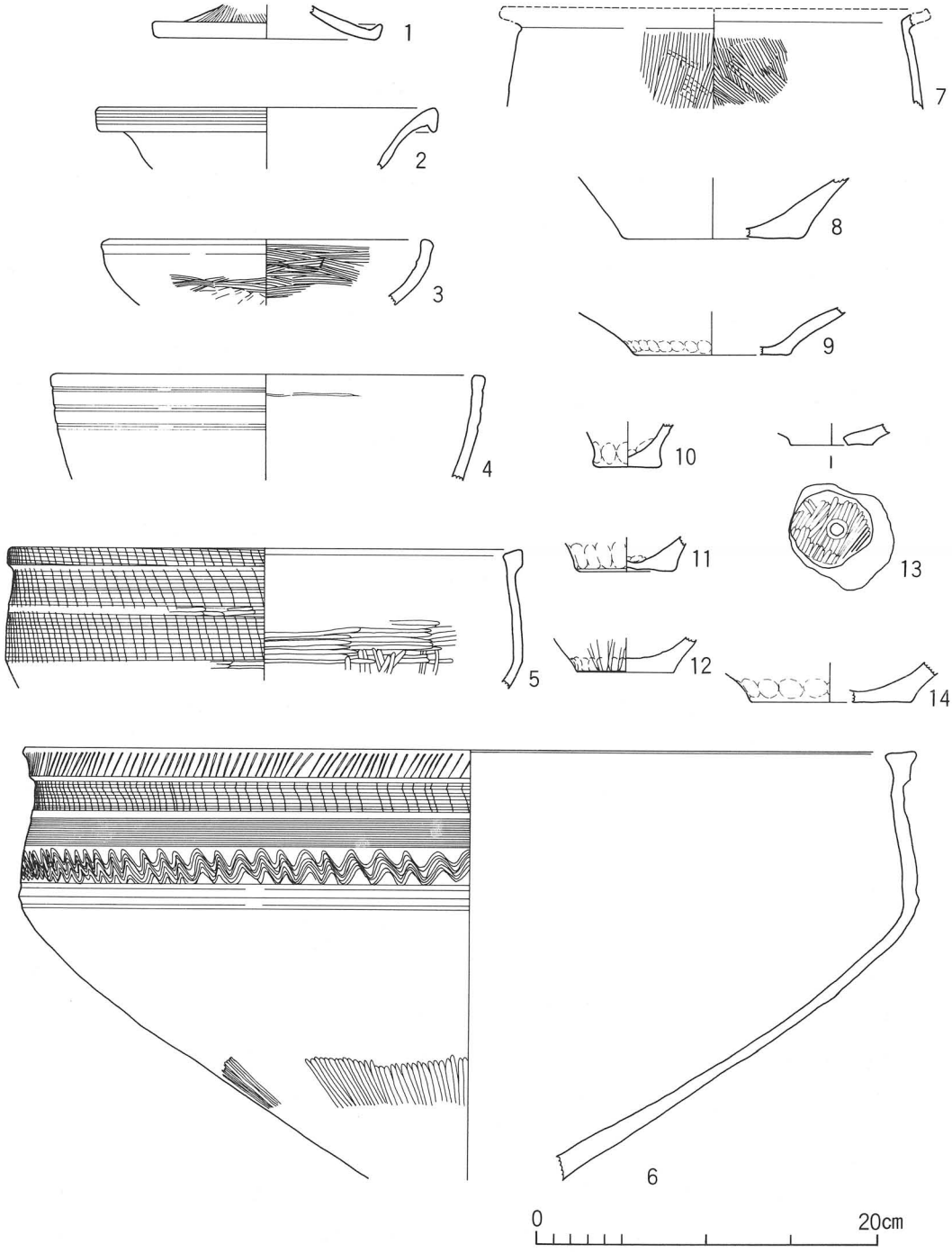
**弥生土器**（挿図８－１～14）

広口壺（挿図８－２）・細頸壺・高杯（挿図８－３）・脚（挿図８－１）・鉢（挿図８－４～６）・甕（挿図８－７）・底部（挿図８－８～14）がある。

**広口壺**（２）　口径19.5cm、残存器高3.7cmを測る。口縁部は頸部からなだらかに外反する。口縁端部は下外方に拡張する。内外面、磨滅と剝離のため調整不明。口縁部外面に櫛描文の痕跡をとどめる。色調は内外面茶褐色。胎土は粗。生駒西麓産。

**高杯**（３）　口径18.4cm、残存器高3.9cmを測る。内彎気味に立ちあがる直口の口縁である。口縁部は上端に面をもつ。口縁部内外面ヨコナデ、杯部外面ヘラケズリの後一部ヨコ方向のヘラミガキ、杯部内面ヨコ方向のハケメ（10本／cm）。杯部外面に黒斑が認められる。色調は内面黄橙色、外面淡黄灰色。胎土は、やや良。

**脚**（１）　裾径12.5cm、残存器高2.0cmを測る。高杯の脚裾部。斜めに広がる裾部。裾端部は斜め上方に拡張する。裾部内面ナデ、外面タテ方向のヘラミガキ。色調は内外面茶褐色。胎土はやや良。生駒西麓産。




挿図８　住居址１出土遺物

鉢（４～６）　口縁部が直口のもの（４）と段状のもの（５・６）がある。

（４）　口径24.9cm、残存器高6.2cmを測る。内彎気味立ちあがる直口の口縁である。口縁部は上端に面をもつ。口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外面に凹線文が３条施される。色調は内面淡橙色、外面黄橙色。胎土は、やや良。

（5） 口径29.7cm、残存器高8.15cmを測る。口縁部は段状を呈し、端部は上端に内傾する面をもつ。体部はやや張り腹部に稜をもつ。口縁部内外面ヨコナデ、体部内面ヘラミガキ、体部外面下半ヘラミガキ。口縁部外面簾状文（原体５本）、体部外面上半簾状文（原体10本・11本）が２条施される。

（6） 口径51.8cm、残存器高25.2cmを測る。口縁部は直立し段状を呈し、端部は、内傾する凹面をもつ。体部はあまり張らず、上半に稜をもつ。口縁部内面ヨコナデ、体部外面下半タテ方向のヘラミガキ、他は磨滅と剝離のため調整不明。口縁部外面列点文（原体不明）、体部上半外面簾状文（原体17本）・直線文（原体16本）・波状文（原体17本）凹線文２条が施される。口縁部外面に黒斑が認められる。色調は内外面乳褐色。胎土は良。

甕（7） 残存器高5.65cmを測る。頸部から体部上半のみ残存。くの字に屈曲する頸部。体部はあまり張らない。頸部内外面ヨコナデ、体部内面ハケメ（９本／cm)、体部外面ハケメ（５本／cm)。色調は内面黄灰褐色、外面淡黄灰褐色。胎土は粗。

**底部**（8～14） 平底のもの（9・10・12・14)、上げ底のもの（8・11)、焼成前に穿孔されているもの（13）がある。

（8） 底径10.0cm、残存器高3.6cmを測る。上げ底。内外面磨滅と剝離のため調整不明。色調は内外面淡灰褐色。胎土は粗。

（9） 底径8.9cm、残存器高2.6cmを測る。平底。底部外面に指頭圧痕が残る。他は磨滅と剝離のため調整不明。色調は内面暗灰色、外面淡灰褐色。胎土は良。

（10） 底径3.4cm、残存器高2.6cmを測る。平底。内外面に指頭圧痕が残る。他は磨滅と剝離のため調整不明。色調は内面淡茶褐色、外面明橙色。胎土は良。

（11） 底径5.4cm、残存器高2.1cmを測る。上げ底。内外面に指頭圧痕が残る。他は磨滅と剝離のため調整不明。色調は内外面淡黄灰色。胎土はやや良。

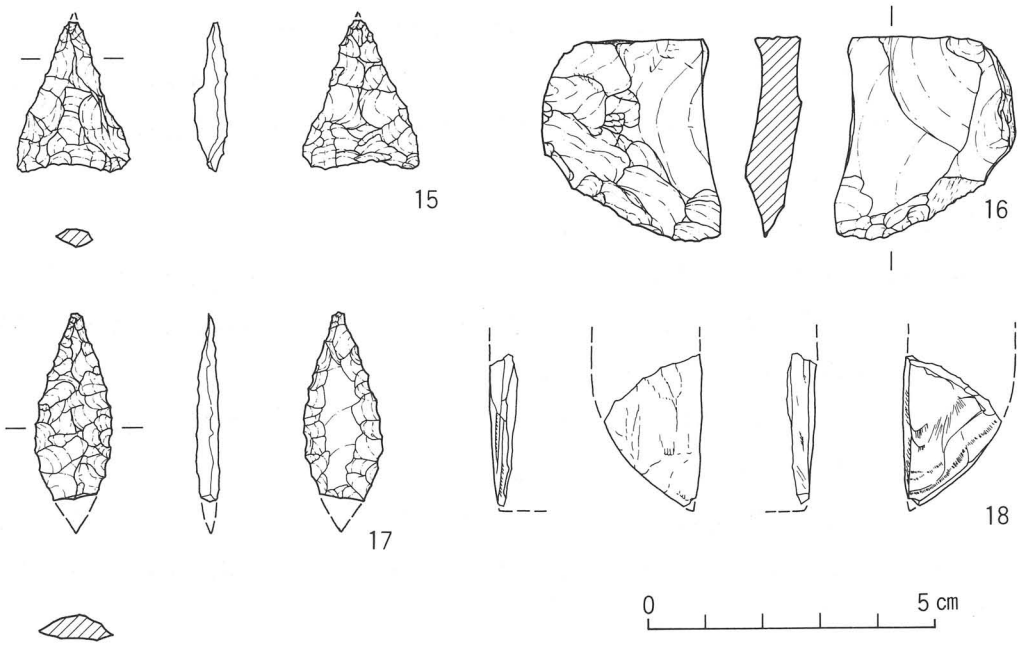
（12） 底径5.5cm、残存器高2.1cmを測る。平底。底部外面タテ方向のヘラミガキ下に指頭圧痕が残る。外底面指ナデ。他は剝離のため調整不明。色調は内面乳灰橙色、外面黄灰色。胎土は良。

（13） 底径4.7cm、残存器高1.25cmを測る。平底。焼成前に底部のほぼ中央に円孔が１孔穿たれている。外底面ヘラミガキ、他は磨滅と剝離のため調整不明。色調は内外面黒褐色。胎土は良。

（14） 底径9.0cm、残存器高2.45cmを測る。平底。外面ヨコナデ下に指頭圧痕が残る。外底面ナデ、他は磨滅と剝離のため調整不明。色調は内面暗灰色、外面明橙色。胎土は良。

**石　器**（挿図９－15・16　図版８）

サヌカイト製の打製石器、石鏃（挿図９－15）・削器（挿図９－16）がある。




挿図９　住居址１・包含層出土石器

**石鏃**（15）　最大長2.625cm、最大幅1.985cm、最大厚0.55cmを測る。凹基無茎式石鏃。先端を欠失。側辺の形態は直線的にのびる。基辺に最大幅をもつ。両面とも周辺から比較的丁寧な調整剥離が施されている。

**削器**（16）　最大長3.105cm、最大幅3.53cm、最大厚1.115cmを測る。上辺と右辺に自然面が残る。下辺に調整剥離を施して刃部を作っている。

**土壙１**（挿図10・図版８）

弥生土器・サヌカイトの剥片が埋土中より出土している。

**弥生土器**（挿図10－19～28・図版８）

広口壷（挿図10－19）・高杯・鉢・蓋・把手・脚（挿図10－24）・甕（挿図10－23）・底部（挿図10－20～22）がある。

**広口壷**（19）　口径14.5cm、残存器高11.9cmを測る。口縁部は、上下にわずかに拡張する。口縁部からゆるやかなカーブを描いて下り、体部は、丸みをもってはる。内外面磨滅と剥離のため調整不明。色調は内面灰褐色、外面茶褐色。胎土は良。

**脚**（24）　裾径15.3cm、残存器高12.4cmを測る。脚部は斜めに直線的に開く。裾端部は、ふんばる。内外面磨滅と剥離のため調整不明。円孔が３段７列焼成前に外から内下方に向かって１回で穿ち、凹線を２条巡らしている。色調は内面淡橙色、外面茶褐色。胎土は、やや粗。

**甕**（23）　口径17.7cm、底径7.0cm、最大腹径21.0cmを測る。口縁部は大きく「く」の字に外反する。口縁端部は面をもつ。体部はゆるやかなカーブを描いて下方に下る。最大径を体

部上半にもつ。底部はわずかに上げ底。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面タテ方向のヘラミガキ、内面上半ヨコ方向のヘラミガキ、下半ナデ下に指頭圧痕が残る。底部外面ヨコナデ、内面ナデ下に指頭圧痕が残る。外底面ナデ。体部外面に黒斑が認められる。色調は内外面暗褐色。胎土はやや粗。生駒西麓産。

**底部**（20～22）　上げ底のもの（20・21）と平底のもの（22）がある。

（20）　底径6.6cm、残存器高6.0cmを測る。わずかに上げ底。底部外面上半タテ方向のヘラミガキ、下半に指頭圧痕が残る。外底面一定方向のヘラミガキ。他は磨滅と剝離のため調整不明。色調は内面暗灰褐色、外面明橙色。胎土は良。

（21）　底径9.4cm、残存器高3.7cmを測る。わずかに上げ底。内外面磨滅と剝離のため調整不明。色調は内面明黄灰色、外面黒灰色。胎土はやや良。

（22）　底径8.3cm、残存器高4.5cmを測る。平底。底部外面タテ方向のヘラミガキ、一部ヘラミガキ下に指頭圧痕が残る。底部内面ヘラケズリ。他は磨滅のため調整不明。色調は内面暗灰褐色、外面淡灰褐色。胎土はやや良。

**ピット8**（挿図10）

弥生土器が埋土中より出土している。

**弥生土器**（挿図10－25）

甕・底部（挿図10－25）がある。

**底部**（25）　底径8.2cm、残存器高4.3cmを測る。上げ底。底部外面ヘラケズリ、外底面ヘラケズリ。他は磨滅のため調整不明。色調は内面淡茶褐色、外面茶褐色。胎土はやや粗。

**ピット9**（挿図10）

弥生土器・土師器が埋土中より出土している。

**弥生土器**（挿図10－26～28）

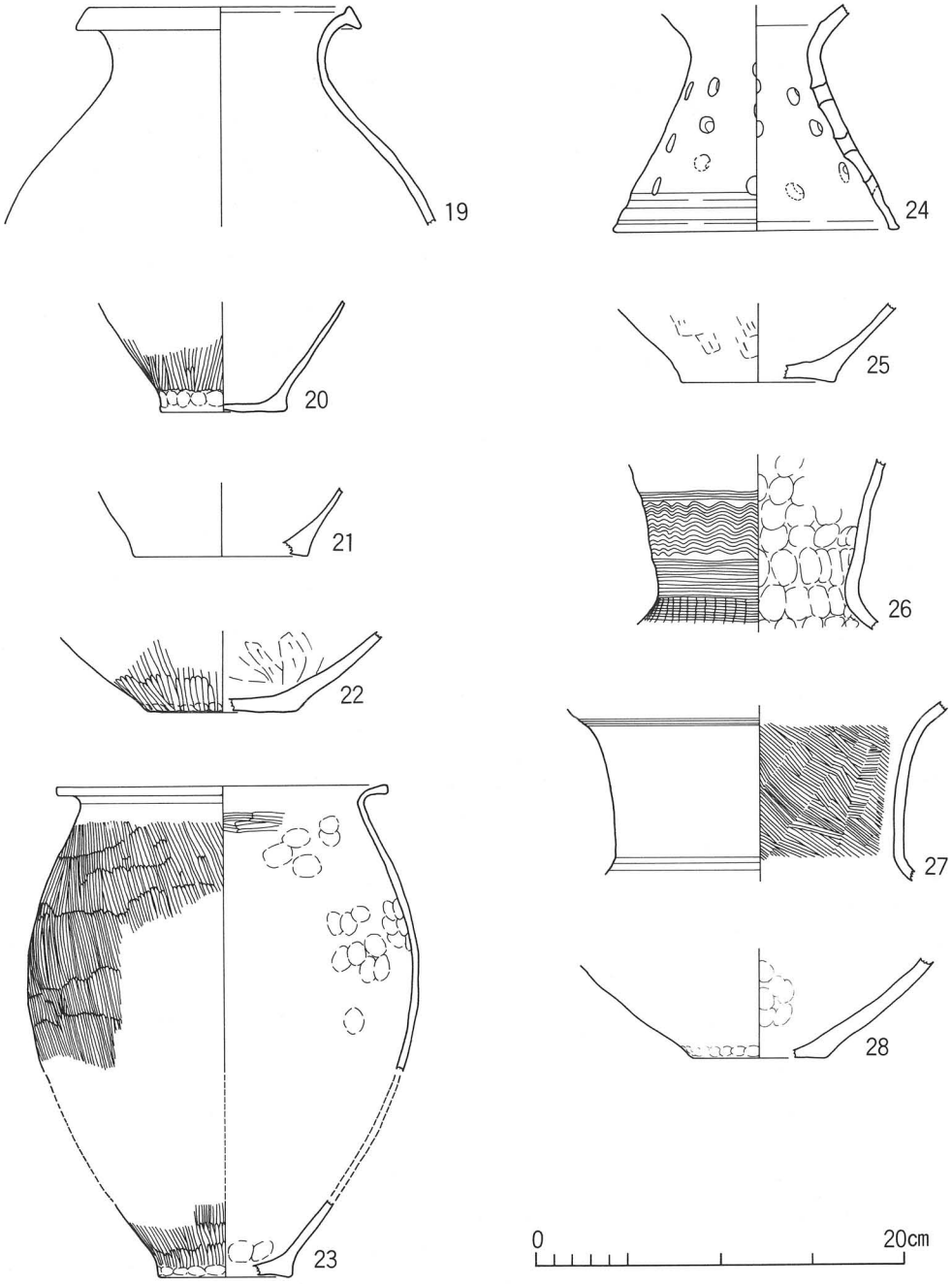
広口壺（挿図10－26・27）・底部（挿図10－28）がある。

**広口壺**（26・27）　いずれも頸部のみ残存する。

（26）　頸基部径11.05cm、残存器高9.35cmを測る。頸部は筒状を呈す。内面指頭圧痕が残る。外面磨滅と剝離のため調整不明。外面直線文（原体5本以上）・波状文（原体25本）・直線文（原体20本）・簾状文（原体12本以上）が施されている。色調は内面淡橙色、外面淡橙灰色。胎土はやや粗。

（27）　頸基部径15.65cm、残存器高9.55cmを測る。頸部は筒状を呈す。内面ハケメ、外面磨滅と剝離のため調整不明。色調は内面淡灰黄色、外面淡灰橙色。胎土は良。

**底部**（28）　底径7.2cm、残存器高5.4cmを測る。平底。内外面磨滅しているが、一部指頭圧痕が残る。




挿図10　土壙１・ピット８・９出土土器

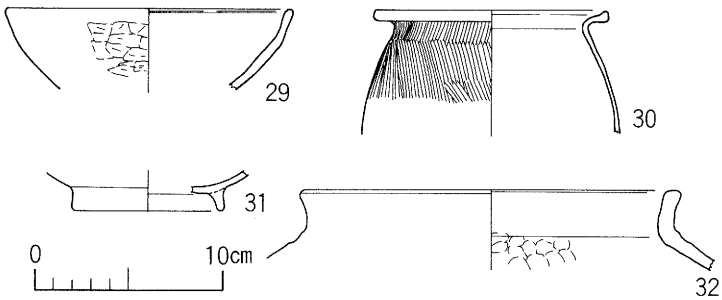
**包含層**（挿図９・11　図版８）

**第５層**（挿図９・11　図版８）

弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・石器・サヌカイトの剝片が出土している。

**弥生土器**（挿図11－30）

広口壺・高杯・鉢・甕（挿図11－30）・脚・底部がある。



挿図11　包含層出土遺物

甕（30）　口径12.1cm、残存器高6.5cmを測る。口縁部は、「く」の字に外反し、端部は上方に拡張。体部はあまり張らない。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケメ（７本／cm）、他は磨滅と剝離のため調整不明。

**土師器**

小皿がある。

**須恵器**

砕片である。

**黒色土器**（挿図11－29）

椀（挿図11－29）がある。

**椀**（29）　口径14.85cm、残存器高4.4cmを測る。内黒の椀である。内彎ぎみに立ち上がり、口縁部はわずかに外反して開く。口縁端部内面に１条沈線が巡る。体部外面、ヘラミガキ、他は磨滅のため調整不明。色調は内面黒色、外面乳茶褐色。胎土は精良。

**瓦器**

椀がある。

**石器**（挿図９－17　図版８）

サヌカイト製の打製石器、石鏃（挿図９－17）がある。

**石鏃**（17）　最大長3.31cm、最大幅1.315cm、最大厚0.44cmを測る。尖基無茎式石鏃。基部を欠失している。側辺がふくらみをもってくだる柳葉形のものである。全体に薄い作りのものである。両面とも側辺から調整剝離を施している。Ｂ面には中央に主要剝離面が残る。

**第３・４層**（挿図９・11　図版８）

弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・磁器・石器・サヌカイトの石核・剝片が出土している。

**弥生土器**

甕・底部がある。

**土師器**（挿図11－32）

皿・杯・羽釜・壷（挿図11－32）・甕がある。

**壷**（32）　口径19.5cm、残存器高19.5cmを測る。直立ぎみに開く口縁部。口縁端部は内傾する面をもつ。体部は大きく開く。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ、体部内面ナデ下に

指頭圧痕が残る。色調は内面茶褐色、外面暗茶褐色。胎土はやや粗。

**須恵器**

蓋杯・壷がある。

**黒色土器**（挿図11－31）

椀（挿図11－31）がある。

**椀**（31）　高台径7.8cm、高台高1.28cm、残存器高2.2cmを測る。内黒の椀である。高台貼り付けのため高台部分はヨコナデ、見込み部分はナデ、他は磨滅のため調整不明。色調は内面黒色、外面乳橙色。胎土は精良。

**瓦器**

椀がある。

**磁器**

碗がある。

**石器**（挿図９－18　図版８）

磨製石器、柱状片刃石斧（挿図９－18）がある。

**柱状片刃石斧**（18）　最大長2.65cm、最大幅1.66cm、最大厚0.44cmを測る。刃部のみ残存。

**第２トレンチ**

第１トレンチに比べると遺物の出土量はかなり少ない。ピット17から土師器・ピット27から弥生土器が数片出土しているにすぎない。包含層からは、第５層からは弥生土器、第４層からは弥生土器・土師器・須恵器・サヌカイトの剝片が数片づつ出土している。　（田川）

## ４．まとめ

大阪府教育委員会が行った国道309号線の調査では、弥生時代中期の竪穴住居址群が検出されている。近年、市教育委員会が実施した国道309号線以南の遺跡南端部分の調査では、弥生時代の遺構は検出されず、円筒埴輪や中世遺物が多量に出土しており、古墳時代から鎌倉時代にかけての遺構が検出されている。この調査地の東方に古墳時代中期の川西古墳があったこととの関係がうかがえる。

今回の調査は小規模の調査範囲ではあったが、調査区の北東部で弥生時代の竪穴住居址１棟を検出した。このことから、弥生時代の居住域の南限が本調査地付近と考えられる。国道309号線の北側では、竪穴住居址とともに方形周溝墓が検出され、遺跡の北端部が墓域であったことが判明しており、弥生集落の様相がしだいに明らかになってきた。　（田川）

# Ⅳ 錦 織 遺 跡

錦織遺跡は市域南部の石川西岸の河岸段丘低位面に立地しており、遺跡の中央を旧国道170号線が走っている。その範囲は東西約300m、南北約900mで、南は近鉄長野線滝谷不動駅付近北は甲田との境界まで広がっている。遺跡の南端には、白鳳期の錦織廃寺も重なっている。

錦織遺跡は、包含層から北白川下層式の土器を出土することで、市内で最初に発見された縄文時代前期の遺跡として位置付けられてきた。その後、大阪府教育委員会や富田林市教育委員会の調査で、中世に至るまでの複合遺跡であることが明らかとなった。1989年の関西電力の鉄塔建替工事に伴う調査で、掘立柱建物の柱痕とともに緑釉の円面硯や塼が出土し、奈良時代の集落が存在することが明らかとなった。遺跡周辺には、「日本書紀」に百済郷という集落があり、百済より移住の外来系氏族が居住していたと言われていることと一致する点でこの調査は重要な発見をもたらしたと言える。また、弥生から古墳時代への激動の時代を物語る庄内式土器も出土している。（今西）

## ＮＫ９２

調 査 地：富田林市錦織４１５－２

調査面積：140㎡／323.9㎡

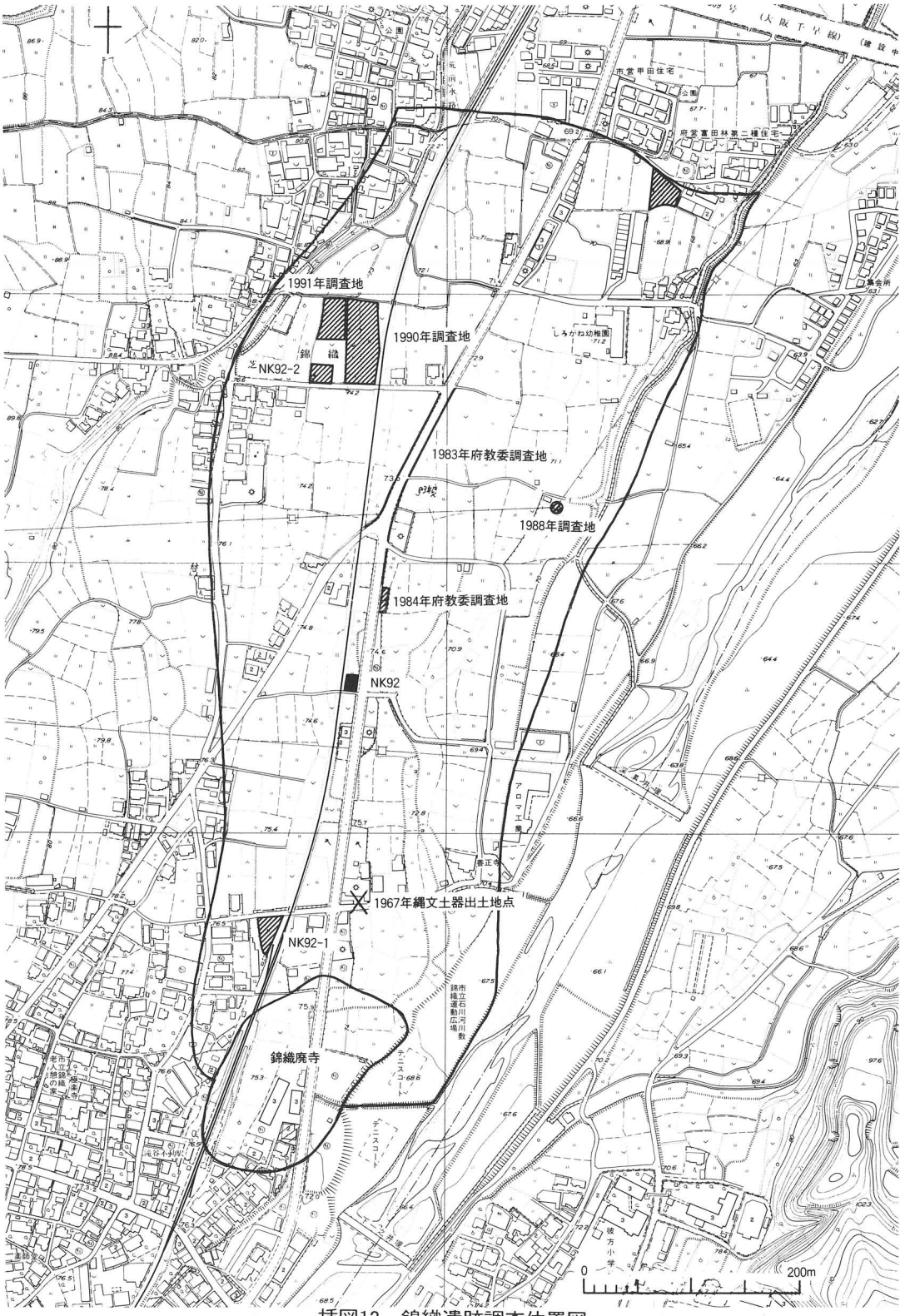
調査地は、旧国道170号線に面した遺跡のほぼ中央に位置する。現況は水田である。

平成４年10月５日に、埋蔵文化財発掘届出書が富田林市教育委員会社会教育課に提出され、鉄骨２階建の個人住宅の建設が計画されており、協議の結果、建物部分と浄化槽部分について発掘調査を実施することとなった。

調査は、平成４年10月22日から12月25日まで行った。まず、浄化槽部分を調査し、遺構の状態を把握した後、工事によって影響の及ぶ遺構面まで全面調査を行った。今回の調査では第１面の遺構を調査した。

### １．層序

基本的な層序は、上から順に第１層・耕土（20cm）、第２層・床土（4cm）、第３層・灰色土（4cm）、第４層・茶灰黄色土（7cm）、第５層・灰褐色砂質土（10cm）、第６層・濁黄灰色弱粘質土（6cm）、第７層・濁灰褐色弱粘質土（8cm）、第８層・濁灰褐色砂質土（8cm）、第９層・暗褐色混礫粘質土（40cm）が堆積する。遺構面は２面あり、第１面は第９層上面、第２面




挿図12　錦織遺跡調査位置図

は第９層下の地山である。

## ２．遺構

溝１、土壙14、ピット61を検出した。

### 溝１

調査区の南端で長さ10.2m分を検出した。東西方向の溝で、東では分岐する。分岐点にはピット状の深まりがある。幅は最も広いところで2.6m、狭いところで0.3mある。深さは、最も深いところで0.23m、浅いところで0.03mである。

### 土壙

調査区の中央から北に集中している。大半が不整形な形状をしている。規模及び出土遺物については、遺構一覧表９を参照されたい。

### ピット

土壙同様北半部に集中している。建物の検討も行ったが、配列については困難であった。以下、土師器小皿が集積しているピットについて解説を加える。その他のピットの規模及び出土遺物については、遺構一覧表９を参照されたい。

#### ピット１

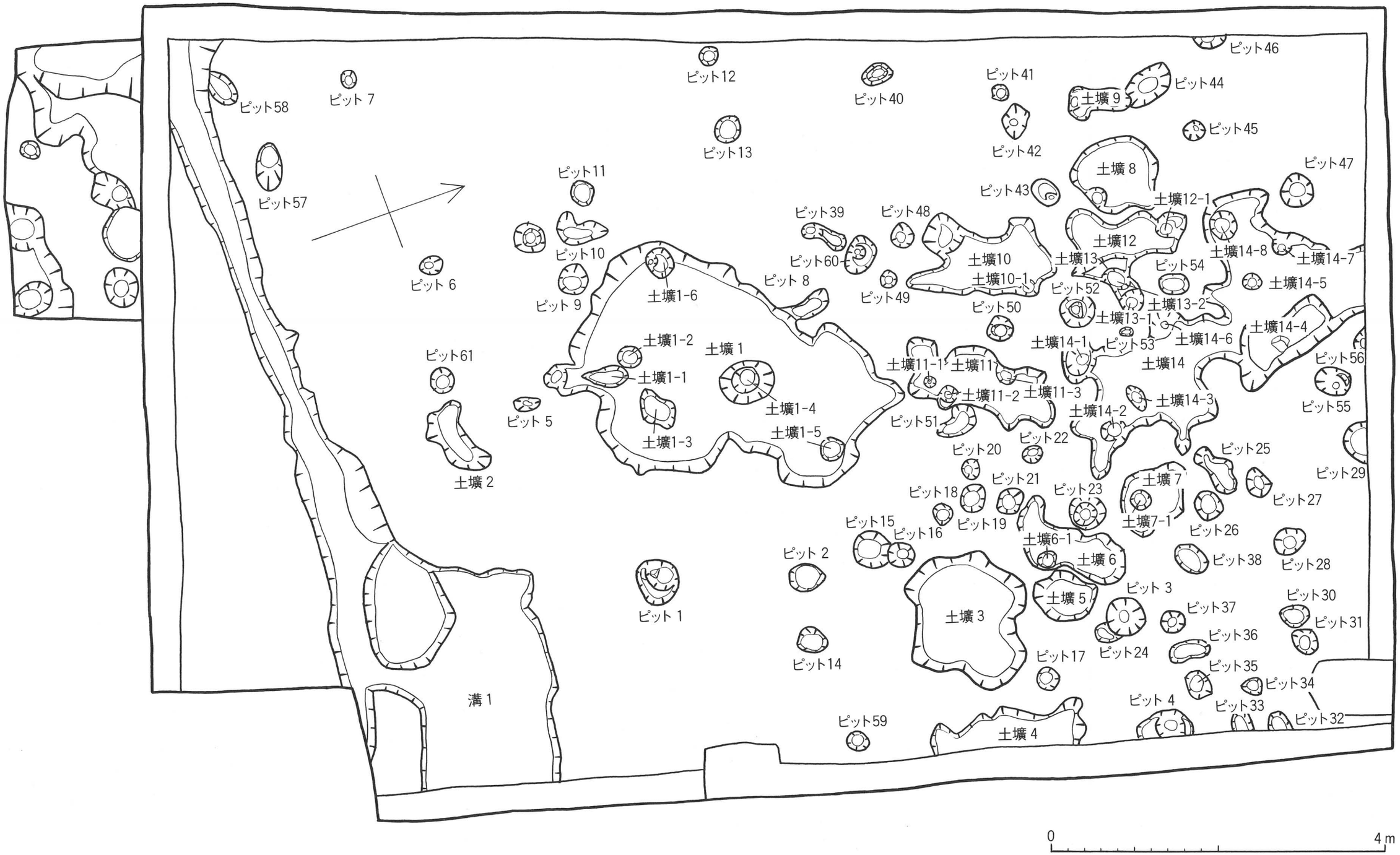
調査区中央にある土壙１の南に位置するピットである。直径約0.5mのほぼ円形をしており、西側では一段深くなっている。最も深いところで0.095mある。直径約９cmの小皿がほとんど口縁部を下にした状態で平面的に重なっていた。埋土は炭片が混じる濁灰褐色土である。

#### ピット３

調査区北東部にあって、ピット24を切っている。直径約0.47mのほぼ円形をしている。深さは最も深いところで0.105mある。直径約９cmの小皿が平面的に重なっていた。ピット１ではほとんどが口縁部を下にしていたが、このピットは上に向いているものと下に向いているものがあった。埋土は暗褐色粘質土がブロック状に混じり、炭片を含む灰褐色土である。

#### ピット４

調査区の北東部、ピット３の東にある。側溝によって切られているため、正確な規模は不明である。南北約0.66m、東西約0.3m分を検出した。ほぼ中央部で一段深くなっている。最も深いところで約0.12mある。このピットはピット１・３の小皿出土状況と異なり無造作に重なっていた。また、皿と皿の間には炭が大量に詰まっていた。埋土は濁灰褐色土である。（今西）


ピット46
ピット12
ピット41
ピット40
土壙 9
ピット44
ピット58
ピット 7
ピット45
ピット13
ピット42
土壙 8
ピット47
ピット11
ピット43
土壙12-1
ピット57
ピット39
ピット48
土壙12
ピット10
ピット60
土壙10
土壙13
土壙14-8
土壙14-7
ピット54
ピット 6
ピット 8
土壙10-1
土壙14-5
土壙1-6
ピット52
ピット49
土壙13-2
ピット 9
ピット50
土壙13-1
土壙14-4
土壙14-1
ピット53
土壙14-6
土壙1-2
土壙 1
ピット61
土壙11-1
土壙11
土壙14
ピット56
土壙1-1
土壙11-2
土壙11-3
土壙14-3
ピット 5
土壙1-4
土壙14-2
ピット55
ピット51
土壙1-3
土壙1-5
ピット22
ピット20
ピット25
土壙 2
ピット21
ピット23
土壙 7
ピット29
ピット18
ピット27
ピット15
ピット19
土壙7-1
ピット16
ピット26
土壙6-1
ピット 2
土壙 6
ピット38
ピット28
ピット 3
土壙 5
ピット30
ピット 1
土壙 3
ピット37
ピット31
ピット36
ピット24
ピット14
ピット17
ピット35
ピット34
ピット 4
ピット33
溝 1
ピット32
ピット59
土壙 4
0
4 m

## 表9 遺構一覧表

| 種別 | 形状 | 規模(m) | 深さ(m) | 土色・土質 | 出土遺物 | | | | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 土師 | 須恵 | 黒色 | 瓦器 | 瓦 | |
| 溝 1 | 不整形 | 10.21×2.64 | 0.235 | 濁灰褐色弱粘質土 | ○ | ○ | ○ | ○ | | サヌカイト |
| 土壙 1 | 不整形 | 4.30×2.79 | 0.190 | 濁灰褐色土に炭片が混じる | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 回転台土師器・サヌカイト |
| 土壙 1-1 | 不整形 | 0.54×0.27 | 0.125 | 濁灰褐色土に褐色土が混じる | ○ | | | ○ | | |
| 土壙 1-2 | 円形 | 0.29×0.27 | 0.115 | 濁灰褐色土に炭片が混じる | ○ | ○ | | | | |
| 土壙 1-3 | 不整形 | 0.44×0.37 | 0.075 | 濁灰褐色土に褐色土が混じる | ○ | | | | | |
| 土壙 1-4 | 楕円形 | 0.64×0.51 | 0.290 | 暗灰褐色弱粘質土に灰黄褐色土がブロック状に混じる | ○ | | | ○ | | |
| 土壙 1-5 | 円形 | 0.30×0.29 | 0.090 | 暗灰褐色弱粘質土 | | | | | | |
| 土壙 1-6 | 楕円形 | 0.37×0.30 | 0.190 | 濁灰褐色土に炭片が混じる | | | | | | |
| 土壙 1-7 | 楕円形 | 0.17×0.10 | 0.205 | 濁灰褐色土に炭片が混じる | | | | | | |
| 土壙 1-8 | 楕円形 | 0.35×0.13 | 0.100 | 濁灰褐色土に炭片が混じる | | | | | | |
| 土壙 2 | 不整形 | 0.94×0.55 | 0.060 | 濁灰褐色土 | ○ | | ○ | | | |
| 土壙 3 | 不整形 | 1.77×1.54 | 0.060 | 濁灰褐色土 | ○ | ○ | ○ | ○ | | 回転台土師器・サヌカイト |
| 土壙 4 | 不整形 | 1.87×0.57 | 0.115 | 濁灰褐色土 | ○ | ○ | ○ | ○ | | 製塩土器 |
| 土壙 5 | 不整形 | 0.74×0.61 | 0.055 | 濁灰褐色土 | ○ | ○ | | | | |
| 土壙 6 | 不整形 | 1.42×0.83 | 0.070 | 濁灰褐色土 | ○ | | ○ | ○ | | |
| 土壙 6-1 | 楕円形 | 0.24×0.20 | 0.055 | 濁灰褐色土 | ○ | | | ○ | | |
| 土壙 7 | 不整形 | 0.79×0.75 | 0.150 | 濁灰褐色土 | ○ | | ○ | ○ | | |
| 土壙 7-1 | 円形 | 0.24×0.26 | 0.125 | 灰褐色土に暗褐色粘質土がブロック状に混じる | ○ | | | ○ | | |
| 土壙 8 | 不整形 | 1.02×0.93 | 0.200 | 濁灰褐色土 | ○ | ○ | | ○ | | |
| 土壙 9 | 不整形 | 0.73×0.40 | 0.260 | 濁灰褐色土 | ○ | | ○ | ○ | | |
| 土壙10 | 不整形 | 1.80×1.01 | 0.090 | 濁灰褐色土 | ○ | ○ | ○ | | | |
| 土壙10-1 | 円形 | 0.12×0.11 | 0.170 | 濁灰褐色土 | ○ | | | ○ | | |
| 土壙11 | 不整形 | 1.99×0.84 | 0.065 | 濁灰褐色土 | ○ | | | | | |
| 土壙11-1 | 円形 | 0.15×0.15 | 0.115 | 濁灰褐色土 | ○ | | | ○ | | |
| 土壙11-2 | 円形 | 0.08×0.09 | 0.130 | 濁灰褐色土に炭片が混じる | ○ | | | ○ | | |
| 土壙11-3 | 円形 | 0.12×0.13 | 0.125 | 濁灰褐色土 | ○ | | ○ | | | |
| 土壙12 | 不整形 | 1.55×0.69 | 0.060 | 濁灰褐色土 | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| 土壙12-1 | 円形 | 0.14×0.13 | 0.105 | 濁灰褐色土に炭片が混じる | | | ○ | | | |
| 土壙13 | 不整形 | 0.73×0.72 | 0.045 | 濁灰褐色土に炭片が混じる | ○ | ○ | | ○ | | |
| 土壙13-1 | 円形 | 0.13×0.12 | 0.095 | 濁灰褐色土に炭片が混じる | | | | | | |
| 土壙13-2 | 楕円形 | 0.23×0.15 | 0.365 | 濁灰褐色土に炭片が混じる | | | | | | |
| 土壙14 | 不整形 | 4.16×2.13 | 0.145 | 灰褐色土 | ○ | ○ | | ○ | | 回転台土師器・塼・製塩土器・サヌカイト |
| 土壙14-1 | 不整形 | 0.34×0.30 | 0.140 | 濁灰褐色土に炭片が混じる | ○ | | ○ | | | |

| 種別 | 形状 | 規模(m) | 深さ(m) | 土色・土質 | 出土遺物 | | | | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 土師 | 須恵 | 黒色 | 瓦器 | 瓦 | |
| 土壙14-2 | 楕円形 | 0.20×0.15 | 0.140 | 灰褐色土 | ○ | ○ | | | ○ | |
| 土壙14-3 | 楕円形 | 0.35×0.18 | 0.070 | 濁灰褐色土に炭片が混じる | ○ | | | ○ | | |
| 土壙14-4 | 不整形 | 0.99×0.49 | 0.125 | 濁灰褐色土 | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| 土壙14-5 | 円形 | 0.22×0.20 | 0.080 | 濁灰褐色土に炭片が混じる | | | | | | |
| 土壙14-6 | 円形 | 0.90×0.90 | 0.025 | 濁灰褐色土に炭片が混じる | | | | | | |
| 土壙14-7 | 円形 | 1.00×0.90 | 0.070 | 濁灰褐色土に炭片が混じる | ○ | | | | | |
| 土壙14-8 | 不整形 | 0.33×0.31 | 0.195 | 濁灰褐色土に炭片が混じる | ○ | | ○ | ○ | | |
| ピット1 | 円形 | 0.50×0.53 | 0.095 | 濁灰褐色土に炭片が混じる | ○ | | | | | 土師器皿A集積 |
| ピット2 | 楕円形 | 0.43×0.34 | 0.045 | 濁灰褐色土に炭片が混じる | ○ | ○ | | | | |
| ピット3 | 円形 | 0.46×0.47 | 0.105 | 灰褐色土に暗褐色粘質土がブロック状に混じり、炭を多量に含む | ○ | ○ | | ○ | | 土師器皿A集積 |
| ピット4 | 不整形 | 0.66×0.30 | 0.125 | 濁灰褐色土 | ○ | ○ | | ○ | | 土師器皿A集積 |
| ピット5 | 楕円形 | 0.32×0.19 | 0.130 | 濁灰褐色土 | ○ | | ○ | | | |
| ピット6 | 楕円形 | 0.28×0.24 | 0.135 | 濁灰褐色土 | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| ピット7 | 楕円形 | 0.19×0.22 | 0.075 | 濁灰褐色土 | ○ | | | | | |
| ピット8 | 円形 | 0.36×0.35 | 0.190 | 濁灰褐色土 | ○ | ○ | | | | |
| ピット9 | 円形 | 0.37×0.37 | 0.135 | 濁灰褐色土 | ○ | | | | | |
| ピット10 | 不整形 | 0.60×0.30 | 0.155 | 濁灰褐色土 | ○ | | | ○ | | |
| ピット11 | 楕円形 | 0.32×0.27 | 0.220 | 濁灰褐色土 | ○ | ○ | | ○ | | |
| ピット12 | 円形 | 0.23×0.23 | 0.155 | 濁灰褐色土 | ○ | ○ | | | | |
| ピット13 | 円形 | 0.31×0.32 | 0.120 | 濁灰褐色土 | ○ | ○ | | ○ | | |
| ピット14 | 不整形 | 0.35×0.31 | 0.060 | 濁灰褐色土 | | | | | | |
| ピット15 | 円形 | 0.42×0.45 | 0.070 | 濁灰褐色土 | | | | | | |
| ピット16 | 円形 | 0.31×0.30 | 0.120 | 濁灰褐色土 | ○ | | | ○ | | |
| ピット17 | 隅丸方形 | 0.28×0.30 | 0.070 | 濁灰褐色土 | | | | | | |
| ピット18 | 円形 | 0.23×0.25 | 0.100 | 濁灰褐色土 | ○ | | | | | |
| ピット19 | 隅丸方形 | 0.34×0.28 | 0.130 | 濁灰褐色土 | ○ | | ○ | | | 回転台土師器 |
| ピット20 | 円形 | 0.22×0.22 | 0.080 | 濁灰褐色土 | ○ | | | ○ | | |
| ピット21 | 隅丸方形 | 0.31×0.27 | 0.095 | 濁灰褐色土 | | | | | | |
| ピット22 | 不整形 | 0.24×0.22 | 0.160 | 濁灰褐色土 | ○ | | ○ | ○ | | |
| ピット23 | 円形 | 0.44×0.42 | 0.305 | 濁灰褐色土 | ○ | ○ | | ○ | | |
| ピット24 | 不整形 | 0.24×0.20 | 0.065 | 灰褐色土に暗褐色粘質土がブロック状に混じる | | | | | | |
| ピット25 | 不整形 | 0.64×0.30 | 0.070 | 濁灰褐色土 | ○ | | ○ | | | |
| ピット26 | 隅丸方形 | 0.35×0.32 | 0.045 | 濁灰褐色土 | ○ | | | | ○ | |
| ピット27 | 不整形 | 0.33×0.25 | 0.075 | 濁灰褐色土 | ○ | | ○ | | | |
| ピット28 | 楕円形 | 0.38×0.32 | 0.230 | 灰褐色土に暗褐色粘質土がブロック状に混じる | ○ | | | ○ | | |

| 種別 | 形状 | 規模(m) | 深さ(m) | 土色・土質 | 出土遺物 | | | | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 土師 | 須恵 | 黒色 | 瓦器 | 瓦 | |
| ピット29 | 不整形 | 0.50×0.27 | 0.140 | 濁灰褐色土 | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| ピット30 | 不整形 | 0.35×0.26 | 0.050 | 濁灰褐色土 | ○ | | | ○ | | |
| ピット31 | 不整形 | 0.35×0.28 | 0.070 | 濁灰褐色土 | ○ | | | | | |
| ピット32 | 不整形 | 0.29×0.20 | 0.010 | 濁灰褐色土 | | | | | | |
| ピット33 | 不整形 | 0.24×0.24 | 0.115 | 濁灰褐色土 | ○ | | | | | |
| ピット34 | 不整形 | 0.24×0.22 | 0.105 | 濁灰褐色土 | | | | | | |
| ピット35 | 隅丸方形 | 0.34×0.27 | 0.060 | 濁灰褐色土 | ○ | | | | | |
| ピット36 | 不整形 | 0.49×0.25 | 0.060 | 濁灰褐色土 | ○ | | | ○ | | |
| ピット37 | 円形 | 0.29×0.26 | 0.135 | 濁灰褐色土 | ○ | | | | | |
| ピット38 | 楕円形 | 0.45×0.31 | 0.050 | 濁灰褐色土 | ○ | ○ | | ○ | | |
| ピット39 | 不整形 | 0.56×0.21 | 0.045 | 濁灰褐色土 | ○ | ○ | | ○ | | |
| ピット40 | 不整形 | 0.34×0.25 | 0.165 | 濁灰褐色土 | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| ピット41 | 隅丸方形 | 0.20×0.19 | 0.090 | 濁灰褐色土 | | | | | | |
| ピット42 | 不整形 | 0.37×0.29 | 0.230 | 濁灰褐色土 | ○ | | | ○ | | |
| ピット43 | 隅丸方形 | 0.34×0.27 | 0.070 | 濁灰褐色土 | ○ | | | ○ | | |
| ピット44 | 不整形 | 0.58×0.39 | 0.245 | 濁灰褐色土に炭片が混じる | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| ピット45 | 円形 | 0.26×0.24 | 0.205 | 濁灰褐色土 | ○ | ○ | ○ | | | |
| ピット46 | 不整形 | 0.39×0.16 | 0.210 | 濁灰褐色土 | ○ | | | | | 製塩土器 |
| ピット47 | 円形 | 0.39×0.41 | 0.215 | 濁灰褐色土 | ○ | | ○ | | | |
| ピット48 | 円形 | 0.27×0.30 | 0.065 | 濁灰褐色土 | ○ | | | ○ | | |
| ピット49 | 円形 | 0.20×0.22 | 0.060 | 濁灰褐色土 | ○ | | | | | |
| ピット50 | 不整形 | 0.29×0.29 | 0.170 | 濁灰褐色土 | | | | | | |
| ピット51 | 不整形 | 0.52×0.34 | 0.040 | 濁灰褐色土 | | | | | | |
| ピット52 | 円形 | 0.42×0.40 | 0.220 | 濁灰褐色土 | ○ | ○ | | ○ | | |
| ピット53 | 楕円形 | 0.17×0.13 | 0.055 | 濁灰褐色土 | | | | | | |
| ピット54 | 楕円形 | 0.35×0.26 | 0.220 | 濁灰褐色土 | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| ピット55 | 隅丸方形 | 0.42×0.31 | 0.190 | 濁灰褐色土 | ○ | ○ | ○ | | | |
| ピット56 | 不整形 | 0.36×0.15 | 0.105 | 濁灰褐色土 | ○ | | | | | |
| ピット57 | 楕円形 | 0.32×0.57 | 0.170 | 濁灰褐色土 | ○ | | | | | サヌカイト |
| ピット58 | 楕円形 | 0.48×0.28 | 0.045 | 灰褐色土 | | ○ | | | | |
| ピット59 | 円形 | 0.25×0.24 | 0.075 | 濁灰褐色土 | ○ | | | | | |
| ピット60 | 不整形 | 0.43×0.36 | 0.115 | 濁灰褐色土 | | | | | | |
| ピット61 | 円形 | 0.30×0.32 | 0.100 | 濁灰褐色土 | ○ | | | | | サヌカイト |

凡例

土師・・・土師器　須恵・・・須恵器　黒色・・・黒色土器　瓦器・・・瓦器　瓦・・・瓦

## 3．遺物

今回の調査で土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、陶器、磁器、製塩土器、瓦、埴輪、塼、土錘、鉄製品、石器が出土している。その中でも、土師器、黒色土器、瓦器を中心とする古代末から中世にかけての資料が多量に出土している。遺構から出土した遺物の種類はすでに表９で見たとおりである。この他、包含層、特に第６層～第９層からは遺物が多量に出土しているが、その中には遺構出土のものと接合するものも多く認められる。ここでは、主な遺構から出土したものを１．遺構出土遺物として遺構の所属時期にかかわる遺物を図化したものを中心に記述する。次に、包含層出土の遺物の中から遺構の年代に関連する資料を抜き出し層位を考えずに、２．包含層出土遺物として記述する。

なお、出土遺物の中には明らかに遺構の所属時期でないものが含まれる。石器遺物、埴輪、６～８世紀にかけての土師器、須恵器、奈良時代の塼、製塩土器がそれである。また、所属時期の不確実な土錘、鉄製品を含めて、３．その他の遺物としてまとめて記述する。

### １．遺構出土遺物

**（１）溝１**（挿図14・１～７・図版14・15）

土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、サヌカイトが出土している。

土師器には皿、杯、羽釜がある。皿には口径８cmと10cmを測る皿Ａと口径15cm～20cmを測る皿Ｂがある。皿Ａの口縁部は外反して端部は丸くおさまる。外面は体部と底部の境に稜をもつもの（１）、口縁部は外反して端部は丸くおさまり、外面は丸みをもって底部にいたるもの（２）がある。皿Ｂには口縁端部が丸くおさまるもの（３）と口縁部内面に沈線のめぐるものがある。杯は高台の付いたものが出土している。高台には断面四角形のしっかりとしたものと断面三角形の小さなものがある。羽釜（４）は内傾した後、外反する口縁部をもつ。

黒色土器はすべてＡ類である。椀が出土しているが、口縁部内面に沈線のめぐるものと、丸くおさまるものがある。前者は体部外面に横方向のヘラミガキが施されている。後者は内外面ともヘラミガキが施されている。

瓦器には皿と椀がある。皿（５）の口縁部は外反して、端部は丸くおさまる。体部は口縁部との境に稜をもちながら底部にいたる。口縁部は横なで調整が、体部外面はなで調整が施されている。内面は磨滅のため調整がわからない。底部外面は粘土結合痕が認められる。椀（６）は口径15.1cm、器高4.7cm、器高指数31.1を測る。口縁部と体部の境はくぼむ。口縁端部は丸くおさまる。高台は断面三角形である。口縁部は内外面とも横なで調整、ただし内面には一部に、横方向のヘラミガキが施されている。体部外面は粘土紐巻き上げ痕が一部に残り、それに対応するような形で、指頭圧痕の列が三段にわたって並んでいる。外面はヘラミガキが認め

られない。内面はなで調整の上から、細筋の粗いヘラミガキが横方向と縦方向に入り交じっている。見込みは円状のヘラミガキの上に平行線状のヘラミガキが重ねられている。この他、見込みに斜格子状のヘラミガキが認められるものもある。いずれにしても、ヘラミガキは細くて粗い。

（2）土壙1（挿図14・8～24、29、30・図版14・15）

土師器、黒色土器、瓦器、須恵器、サヌカイトが出土している。

土師器には皿と杯と羽釜がある。皿には口径10cm前後の皿Aと口径15cm前後の皿Bがある。皿Aには口縁部内面に段をもち、外面に細筋の沈線をめぐらせ、全体に「て」の字口縁に近い形態を呈し、体部は丸みをもちながら底部にいたるもの（8）、口縁部は内面に沈線をめぐらせ、外面は体部との境で屈曲して底部にいたるもの（9）、口縁部は外反し、端部を丸くおさめ、外面は体部との境で稜をもって底部にいたるもの(10)、口縁部は外傾し、短部を丸くおさめ、そのまま底部にいたるもの(11)がある。なお、(11)の底部は回転糸切り痕をもつ、いわゆる回転台土師器である。皿Bは、すべて口縁端部を丸くおさめるが、口縁部が大きく開き、横なで調整を数回にわたって施し、深めの体部をもつもの(14)と口縁部は一回の横なでで外反させ、そのまま底部にいたるもの(15)がある。杯には口径15cm程度で高台の付かない杯Aと口径10cm前後で高台の付く杯Bがある。杯A(16)(17)は口縁部がわずかに外反し、端部が丸くおさまる。杯Bには口縁部が外反気味に開いて、端部が丸くおさまり、浅めの体部に大きめの高台が付くもの(12)と口縁部は丸くおさまり、浅い椀状の体部と断面三角形の高台をもつもの(13)がある。羽釜には口縁部が、内傾した後大きく開くもの(29)と内傾する口縁部をもつもの(30)がある。前者は厚手の羽釜で、ほぼ水平の鍔がめぐる。後者はやや薄手で、上向きかげんの鍔がめぐる。ともに口縁端部は丸くおさまる。口縁部は横なで調整が、体部は内外面ともなで調整が施されている。なお、(30)は体部の外面に一部、平行タタキ調整が認められる。鍔部下面から下は煤が付着している。

黒色土器はA類が出土しているが、残存状態はあまり良くない。椀(18)は口縁端部が丸くおさまり、調整は外面になで調整が認められる以外、磨滅のためわからない。また、この土器は他の黒色土器に比べると、胎土が精良で、瓦器のような土質である。この他、断面四角形でふんばるような高台をもつものも認められる。

瓦器には皿と椀がある。皿(19)～(21)は口径8.5cm～10cmを測る。口縁部と体部の境にかすかに稜をもつ。口縁部はすべて丸くおさまる。口縁部は横なで調整で、一部、上から横方向のヘラミガキが付加されている。体部は内外面とも横方向のヘラミガキが施されているが、空白部が目立つ。外底面はすべて平行線状のヘラミガキが施されているが、かなり密に施されて

いるものとそれほど密でないものが認められる。見込みには平行線状のヘラミガキが施されるもの(20)(21)、不規則なヘラミガキが施されるもの(19)がある。体部から底部にかけてはヘラミガキの前になで調整が施されているものが多いが、ヘラケズリ調整の認められるものもある。椀(22)～(25)は口径14.3cm～15.3cm、器高5.2cm～5.6cm、器高指数36.3～40.1を測る。口縁部はすべて丸くおさまる。口縁部は横なで調整の上から横方向のヘラミガキが施されているが、かなり密に施されているものと粗いものがある。体部は内外面ともなで調整が施されているが、外面は凹凸がはげしい。外面のヘラミガキは上位が横方向で、中位以下は不規則で方向が定まらないものが多い。ヘラミガキの大半は体部の2/3付近で終わっているが、(25)は高台付近まで施されている。内面のヘラミガキは口縁部付近は横方向に、体部は中位以下がほぼ斜方向にではあるが不規則なヘラミガキがかなり密に施されている。見込みは斜格子のもの(25)、不規則なもの(22)(24)がある。後者の方が多く出土している。この他、量は少ないが、体部外面の調整にヘラケズリが施されているものがある。ヘラケズリの上のヘラミガキはかなり粗く、不規則な方向に施されている。

**（3）土壙1－4**（挿図14・26～28）

土師器と瓦器が出土している。

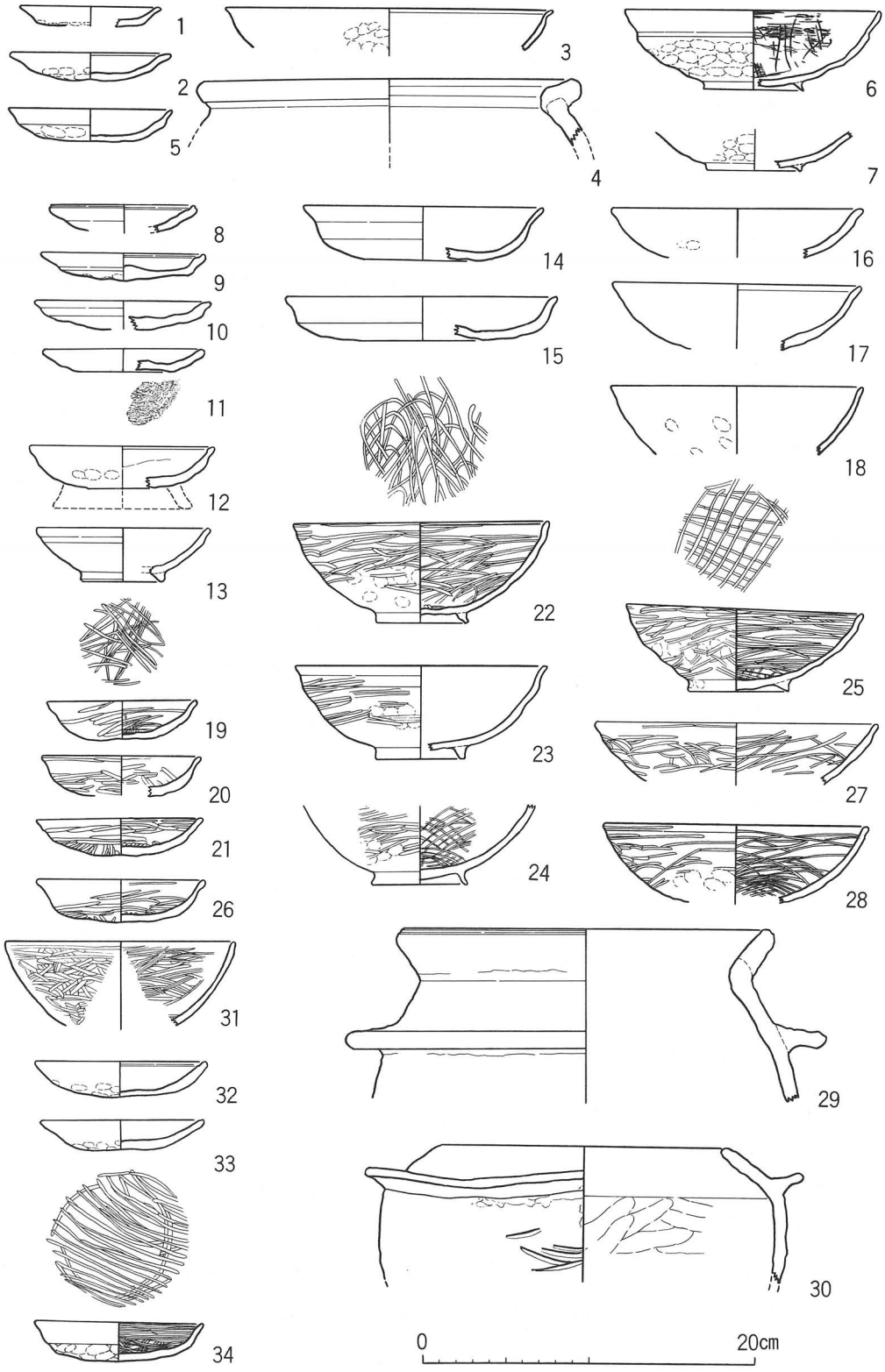
土師器には皿がある。口径10cm前後の皿Aで平坦な底部にかるく上方へ折り曲げる口縁部をもつ。

瓦器には皿と椀がある。(26)皿は口径10cmを測る皿Aである。口縁部は外反ぎみに開き、端部は丸くおさまる。底部は丸みをもつ。口縁部は内外面とも横なで調整で、内面には一部、上から横方向のヘラミガキが施されている。底部は内外面とも平行状のヘラミガキが施されているが密でない。見込みのヘラミガキは平行線の上から圏線を重ねるように施されているが、方向性は認められない。椀(27)は口径16.7cm、(28)は口径15.5cmを測る。ともに器高指数がおそらく35程度を測る。口縁部はほぼまっすぐに開き、口縁端部は丸くおさまる。口縁部は内外面とも横なで調整が施されている。外面の一部には横方向のヘラミガキが施されている。体部は内外面とも、なで調整の上から不規則な方向に細筋のヘラミガキが施されている。(28)は内面のヘラミガキは密であるが、外面は粗い。(29)は内外面とも粗く、空白部が目立つ。なお、体部外面は凹凸が著しく認められる。

**（4）土壙10－1**（挿図14・31）

土師器、瓦器が出土している。

瓦器には椀がある。口縁端部は丸くおさまる。外面のヘラミガキは口縁部上端部まで施されて


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
0
20cm

挿図14　遺構出土遺物

いるものと、口縁部は横なでのままでヘラミガキが施されているもの(31)がある。体部のヘラミガキは不規則な方向に施されている。なお、(31)は炭素の吸着が悪く、外面半分は灰色を呈す。

（5）土壙11（挿図14・32　図版15）

土師器が出土している。

皿が2点出土している。(32)は口径10.1cmを測る皿Aで、口縁部が外傾し、端部は内面に沈線がめぐる。口縁部は内外面ともなで調整が施されている。底部外面には粘土結合痕が底部のほぼ中央から口縁部に向かって「く」の字状に認められる。粘土板は左回りに押しのばしたらしく指頭圧痕が左回りの方向に螺旋状に認められる。また、それに対応するように、内面にも指頭圧痕による凹凸が右回りの方向に認められる。

（6）土壙11－1（挿図14・33、34　図版14・15）

土師器と瓦器が出土している。

土師器には皿と椀がある。(33)は口径9.7cmを測る皿Aで、口縁部が外傾し、端部は丸くおさまる。口縁部は内外面ともなで調整が施されている。底部外面には粘土結合痕が底部のほぼ中央から口縁部に向かって半円を描くように認められる。体部は内外面ともなで調整が施されている。

瓦器には皿と椀がある。(34)は口径10.0cmを測る皿で、口縁部が外傾し、端部は丸くおさまる。口縁部外面はなで調整が、内面は横方向のヘラミガキが密に施されている。見込みには平行線状のヘラミガキが粗く施されている。外面は粘土結合痕が底部周辺をとりまくように大きな半円を描いて認められる。また、結合部を強くするために押さえたらしく、指頭圧痕が特に顕著に粘土結合痕の上に残っている。

（7）土壙13出土遺物（挿図15・35～40、図版14）

土師器、須恵器、瓦器が出土している。出土点数は少ないが、瓦器椀の内面調整であるヘラミガキがバラエティーに富んでいる。

土師器には杯がある。3点出土している。その内の1点は台付きで、接地部分が張り出しふんばる形態を呈す。

須恵器は瓶（40）が1点出土している。口縁部は大きく外反し、端部は上方にわずかに肥厚する。体部は張り出さない。調整は内外面とも回転なでが施されている。

瓦器は椀がある。8点出土しているが器形はほぼ同じである。口径は14.8cm～16.4cm、器高は5.6cm～6.1cm、器高指数は36.9～39.3を測る。口縁部は外反ぎみに開き、丸み

をもって底部にいたる。高台は断面三角形のものと断面四角形のものがある。口縁部には横なで調整が施されている。体部から底部にかけて、内外面には、なで調整の後ヘラミガキが施されている。体部外面は凹凸が目立つ。ヘラミガキは太く、内面は密に、外面は粗く施されたものから、内外面とも細くて粗く施されたものがある。前者のヘラミガキが認められるものの中には、口縁部については一部だけ横方向に施されたものと、全く施されていないものがある。体部外面は不規則な方向のものが混じりながらも、ほぼ横方向に体部の2/3付近まで施されている。内面は不規則な方向に施されるものと、見込みからのびてきた放射状のヘラミガキが曲線を描きながら口縁部に向かうもの（35）がある。見込みのヘラミガキは前述した放射状のものの他、平行線状のもの（36）もある。後者（38）には口縁部から体部下位までほぼ横方向のヘラミガキが施されている。見込みは粗い平行線の上に斜格子を付加したヘラミガキが施されている。なお、体部外面に粘土紐の巻き上げ痕が認められるもの(35)があり、中位と底部付近にほぼ水平方向に認められる。

（8）土壙14（挿図15・41　図版15）

土師器、瓦器、須恵器、製塩土器、塼、サヌカイトが出土している。

土師器には皿がある。(41)は口径9.4cmを測る皿Aである。口縁部が「て」の字状を呈す。底部外面には粘土結合痕がほぼ中央から口縁部に向かって「く」の字状に認められる。内底面にも若干、位置はずれるものの粘土結合痕が認められる。この他、細片ではあるが、器壁の厚みからみて皿Bらしきものも認められる。底部に回転糸切り痕をもつ回転台土師器である。

瓦器には椀がある。口縁部はすべて丸くおさまる。内外面のヘラミガキは太く、密に施されている。見込みのヘラミガキは斜格子と平行線状のものがある。

（9）土壙14－1（挿図15・42）

土師器と黒色土器がある。

土師器には皿がある。(42)は口径10cmを測る皿Aで、口縁部はわずかにつまみあげ、端部は丸くおさまる。

(10) ピット1（挿図15・43～54　図版16）

土師器の皿が完形で12点出土している。皿は口径9.1cm前後で、器高1.5cm前後を測る。すべて同じ胎土、同じ調整で作られている。すなわち、口縁部は外反して、端部は丸くおさまる。口縁部と底部の境は屈曲している。口縁部内外面は一回の横なで調整、底部内面は不定方向のなで調整、外面は指頭圧痕のため凹凸が残るものの、なで調整が施されている。色調は赤褐色

で胎土は粗い。調整にあたって、まず、底部内外面を調整した後、口縁部を整えている。これらの内の6点には粘土結合痕が認められる。(45)と(52)は粘土結合痕が特に明瞭に残る。とりわけ、(52)は結合時にかなり大きくひねったらしく、中央から大きく円を描きながら口縁部との境までのびている。(45)はほぼ中央から「く」の字状に認められる。

(11) ピット2 (挿図15・55～57　図版15)

土師器、瓦器、須恵器が出土している。

土師器には皿が2点ある。大きさには若干、差異のあるものの、2点とも同じ胎土、同じ調整である。底部は粘土紐を左回りに巻いて作つた痕跡が明瞭に残る。口縁部は最後に横なで調整を施して整えている。

瓦器は椀が1点ある。(57)は口径13.7cmを測る。口縁端部は丸くおさまる。口縁部は横なで調整の上から、外面の一部分に横方向のヘラミガキが施されている。体部外面はヘラケズリの上から粗いヘラミガキ、内面はなで調整の上から粗いヘラミガキを施している。

須恵器は細片のため、器種は不明である。

(12) ピット3 (挿図15・58～86　図版16)

土師器、瓦器、須恵器が出土している。

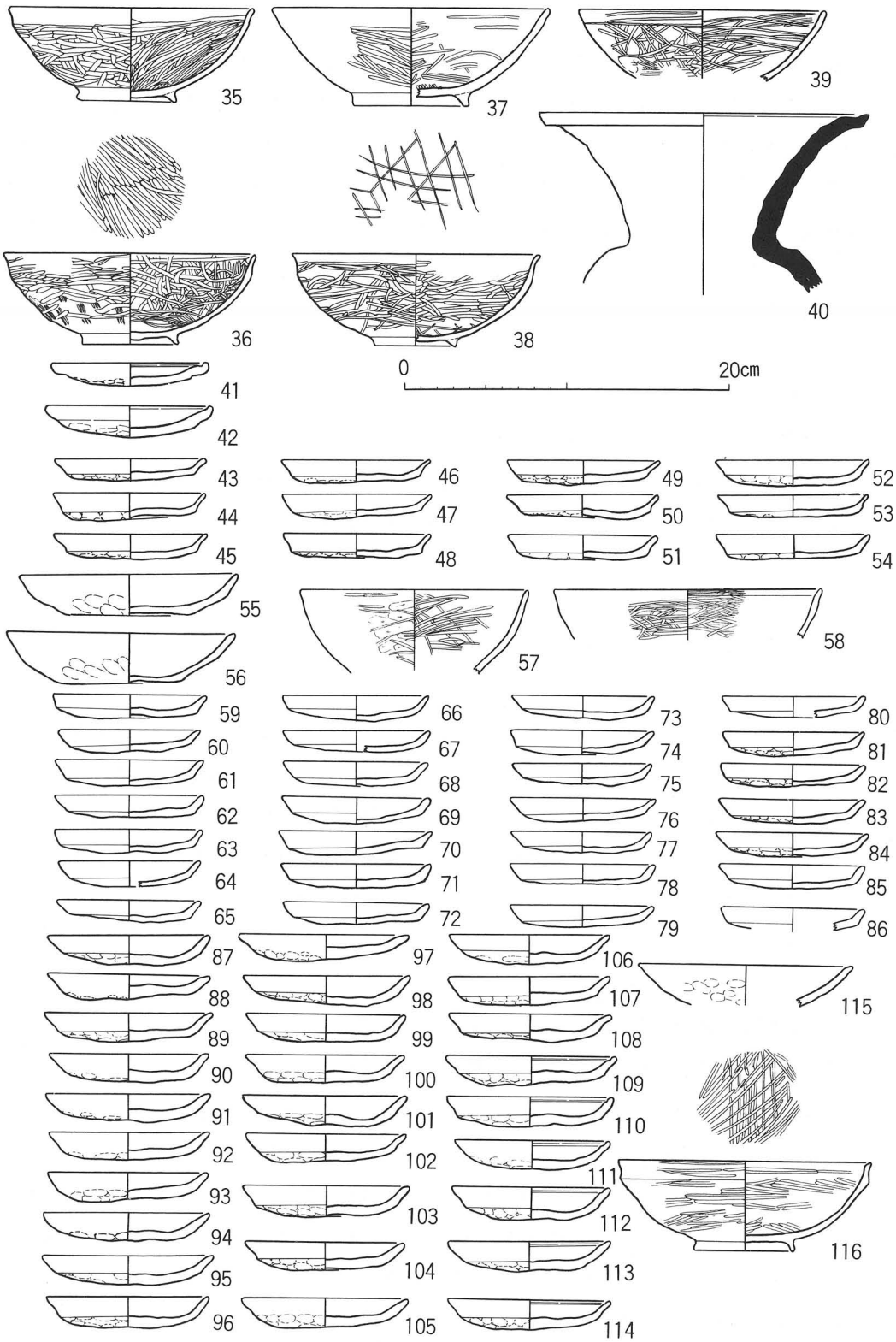
土師器は皿がほぼ完形も含めて、完形が29点、細片が4点出土している。口径8.5cm前後、器高1.5cm前後を測る。これらはすべて同じ胎土、同じ調整である。すなわち、口縁部は外傾して、端部は丸くおさまり、口縁部と底部の境には稜をもつ。底部は内外面ともなで調整が施されているが、口縁部より先にほぼ一定方向に丁寧に施されていて凹凸が少ない。底部外面には粘土結合痕が認められるものもあるが、全体に残っている範囲も狭くわかりにくい。色調は淡黄白色で、胎土は精良である。

瓦器は口径16.2cmを測る。口縁端部は丸くおさまる。口縁部は内外面とも横なで調整が施されているが、内面は上から横方向のヘラミガキが付加されている。体部は外面には不規則なヘラミガキが、内面には横方向と斜方向が交差したようなヘラミガキが施されている。

(13) ピット4 (挿図15・87～114　図版17)

土師器、瓦器、須恵器が出土している。瓦器、須恵器とも細片である。

土師器には杯と皿がある。杯は2点あり、口縁部内面には沈線がめぐる。皿はほぼ完形も含めて、完形が35点、細片が2点出土している。口径8.8cm～10.35cm.器高1.5cm～2.22cmを測る。これらはすべて同じ胎土で、同じ調整であるが、整形具合に若干差異がある。すなわち、


35
37
39
36
38
40
0
20cm
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116

挿図15　遺構出土遺物

口縁部は丸くおさまるものと内面に沈線のめぐるものがある。また、口縁部と底部の境には稜をもつものともたないものがある。口縁部の形態と底部の形態には相関関係はなく、単に調整時のなで方によって生じただけのようである。調整は口縁部内外面と内底面の一部を最初、数回横なでし、その後、底部内外面になで調整を施している。この時のなで調整は非常に雑で、口縁端部にまでなでがおよび、そのために器形の変形を招く結果になっている。また、底部外面は凹凸が顕著に残るものが多い。色調は淡白橙色で、胎土は粗い。底部外面には粘土結合痕が認められるものが多い。

(15) ピット44（挿図15・115）

土師器、黒色土器、瓦器、須恵器が出土している。

土師器には皿がある。(115)は口径13.1cmを測る。口縁部は外傾して大きく開き、端部は丸くおさまる。口縁部の内外面は横なで調整が施されている。

黒色土器はB類である。

(16) ピット52（挿図15・116）

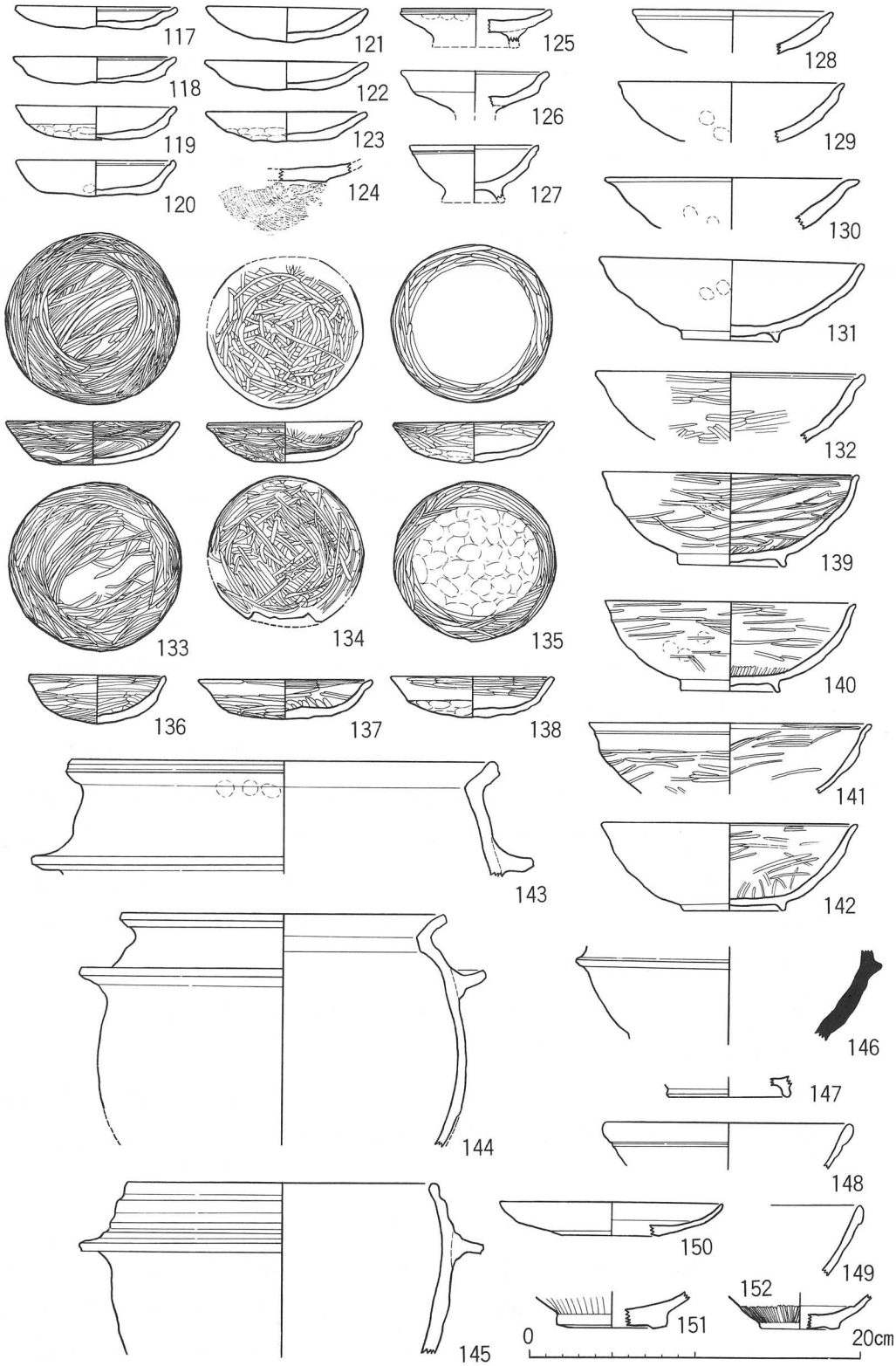
土師器、須恵器、瓦器が出土している。

瓦器には椀がある。椀は2点あるが、(116)は口径15.3cm、器高5.7cm、器高指数37.2を測る。口縁部は立ち上がって外反し、口縁部は内面で面をもつ。高台は断面四角形を呈するが、薄手に作られている。口縁部は内外面とも横なで調整の上から横方向のヘラミガキが付加されている。体部は内外面とも横および斜方向のヘラミガキが施されている。見込みは斜格子のヘラミガキが施されている。この他、見込みに太くて、密に施された平行状のヘラミガキの認められるものもある。

2．包含層出土遺物（挿図16・117～152　図版14・15）

土師器、黒色土器、瓦器、須恵器、灰釉陶器、白磁がある。

土師器には皿、杯、小型椀、羽釜がある。皿には口径10cm前後の皿Aと13cm～15cm程度の皿Bがある。皿Aの中には台部のつくもの(125)(126)も認められる。口縁部は「て」の字口縁のもの(117)、外反して内面に沈線のめぐるもの(118)、外反して大きく開き、端部が丸くおさまるもの(119)、外傾して内面に沈線のめぐるもの(120)、底部から丸みをもって口縁部にいたり、端部が丸くおさまるもの(121)～(123)、底部に回転糸切り痕をもつもの(124)がある。(125)は口縁端部外面に沈線がめぐる。皿B(128)は口縁部がほぼストレートに開いて、端部は丸くおさまる。杯には口縁部が外反して端部が丸くおさまるもの(129)、口縁部が大きく外反し




挿図16　包含層出土遺物

て、上端に面をなし、端部が丸くおさまるもの(130)、口縁部内面に沈線のめぐるものがある。小型椀(127)は１点だけ出土しているが、口径7.75cm、残存器高3.35cmを測る。器高指数はおそらく44.5程度で比較的深めの椀である。羽釜は口縁部が内傾した後、屈曲して外反するもの(143)、内傾した後、なだらかに外反するもの(144)、内傾して端部が丸くおさまるもの(145)、外反した口縁部の端部が丸く肥厚するものがある。

黒色土器には椀がある。Ａ類とＢ類があるがＡ類が圧倒的に多い。(131)はＡ類であるが、口縁部はほぼストレートにのびて端部が丸くおさまる。(132)はＢ類であるが口縁部は外反して内面に沈線がめぐる。口縁部の形態はＡ類、Ｂ類にかかわらず、後者が圧倒的に多い。黒色土器は全体的に残りが悪く、調整のわかるものは少ない。

瓦器には皿と椀がある。皿には口縁部がストレートにのびるものと外反するものがある。口縁部は横なで調整後、横方向のヘラミガキが施されているが、内外面ともに密に施されているもの(133)(134)、内外面両方だがそれほど密でないもの(136)～(138)、外面だけに施されているものがある。外底面には平行線状のヘラミガキが施されているものが多いが、不規則な方向に施されているもの、ヘラミガキの全く施されていないものも認められる。見込みのヘラミガキには平行線状のもの、不規則な方向のもの、斜格子のものがある。椀は口径15.1cm～17.0cm、器高5.4cm～5.7cm、器高指数35.2～37.2を測る。口縁部は外反するものが多い。

口縁部は内面上端に面をもつものともたないものがあるが、端部は丸くおさまるものが圧倒的に多い。ただ１点、第７層から口縁部内面に沈線のめぐるものが出土している。調整は口縁部は内外面とも横なでが施されているが、中には上から横方向のヘラミガキが付加されるものもある。体部は内外面とも横もしくは斜方向のヘラミガキが施されているが、細筋で粗く、空白部が目立つ。見込みのヘラミガキは平行状のもの、斜格子のもの、ジグザグ状のもの、不規則な方向に施されるものがある。

須恵器には鉢がある。(146)の形態の他に東播系の鉢が１点だけ認められる。

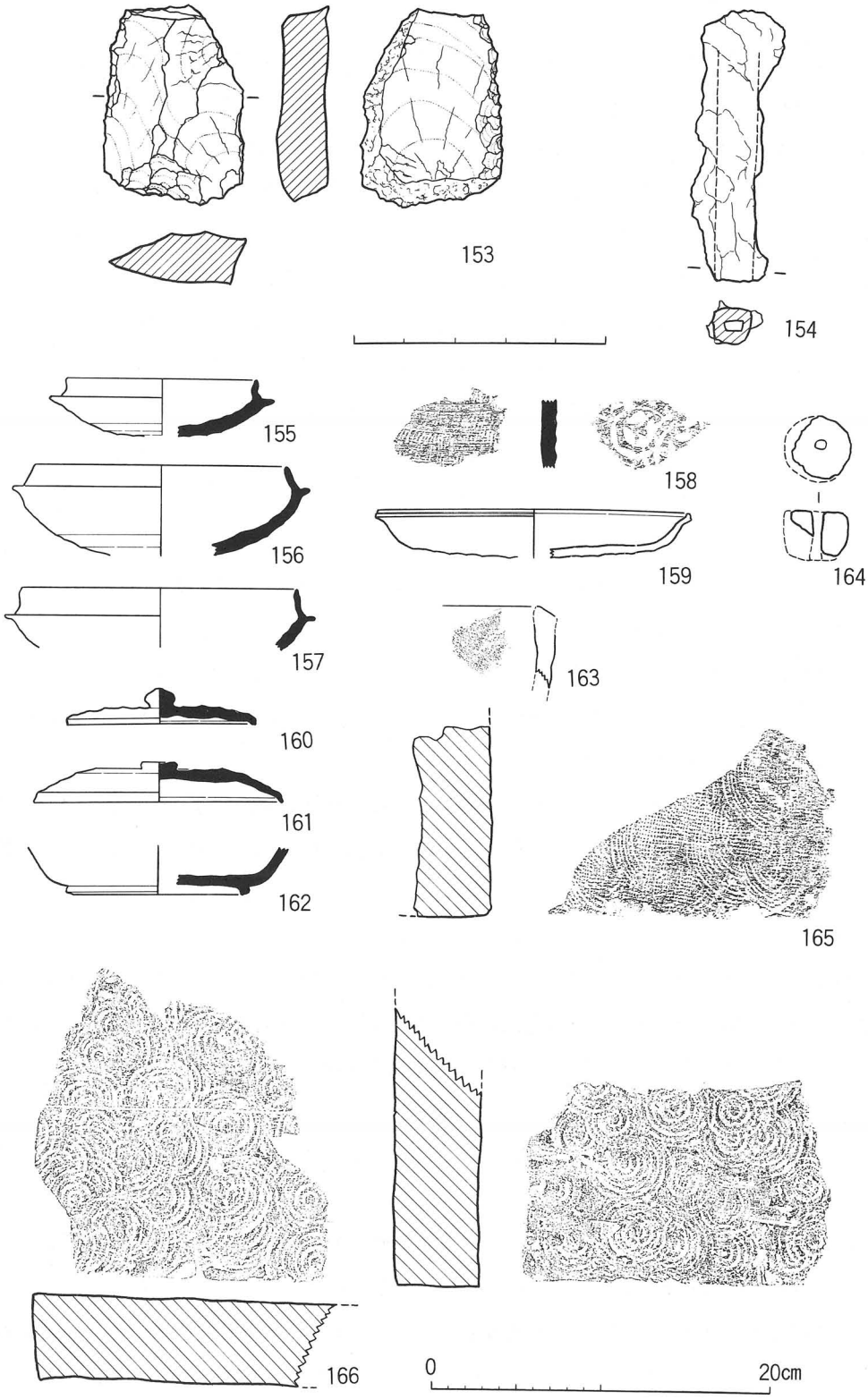
灰釉陶器は１点だけであるが、高台部片が認められる。

白磁には椀と皿がある。椀(148)(149)は口縁部が薄い玉縁状を呈し、器壁は薄い。皿(150)は口径は13.1cmを測り、口縁端部が丸くおさまる。この他、底部の破片も出土している。

### ３．その他の遺物（挿図17・153～166　図版17）

石器遺物、鉄製品、須恵器、土師器、製塩土器、土錘、埴輪、塼、瓦がある。

石器遺物にはサヌカイト製の打製品として、直刃削器、石核、剥片、原石がある。この他、緑色片岩製の石斧、和泉砂岩製のハンマーがある。直刃削器（153)は原面打面の打瘤の発達しない剥片を素材にして左縁に平形深形直線形裏面細部調整と左縁中央に平形深形直線形表面細




挿図17　その他の遺物

部調整で刃部をつくりだしている。先端部は表面からの折り面である。長さ39.5㎜、27.3㎜、厚さ9.9㎜を測る。石核は6点ある。そのうち、剝片素材のものは3点である。剝片は59点ある。素材の形態をみると横形剝片20点、剝片23点、石刃状剝片1点、不明15点がある。打面は欠失したものが多い。なお、石刃状剝片の1点は垂直割れをうけている。原石は1点ある。大きさは97.2×90.1×57.1(㎜)を測る。石斧は破片の厚みと磨面の状況からみて、太形蛤刃石斧とおもわれる。ハンマーは卵形を呈し、大きさは112.2×65.3×86.5(㎜)を測る。片面に敲打痕が、反対側の面は敲打のために欠失している。また、全体に焼成をうけ赤変している。

鉄製品には釘がある。残存長5.4cm、幅0.75cmを測り断面四角形を呈す。

須恵器には古墳時代〜奈良時代にかけての蓋杯と甕がある。古墳時代の杯である(155)は口径11.1cmを測る小さめのものである。底部外面にはおそらく「×」印と思われるヘラ記号が認められる。陶邑II型式1段階に比定できる。(156) は口径14.7cm、(157)は口径16.1cmを測り、かなり大型化してきた杯である。陶邑II型式2〜3段階に比定できる。この他、器形が矮小化して、たちあがりが極めて短くなる陶邑II型式6段階のものも認められる。なお、この時期のものと思われる甕の破片(158)には内面に「十」字のタタキ目文の認められるものがある。奈良時代のものである蓋(160)は口径11.0cmを測るもので、天井部は偏平で、擬宝珠様のつまみがつく。(161)は口径14.6cmを測り、ふくらみをもつ天井部に偏平なつまみをもつ。杯(162)は断面四角形の高台がつく。

土師器には飛鳥時代の羽釜、奈良時代の皿がある。羽釜は生駒西麓の胎土をもつもので1点出土している。皿は口径18.1cmを測るもので、口縁部は外反して開き、口縁端部は内側に丸く肥厚する。口縁部は内外面とも横なで調整が施されている。底部内面はなで調整だけで暗文は認められない。外面はヘラ削りが施されている。

製塩土器は3点出土している。器壁の厚さは9㎜を測り、口縁端部が丸くおまるもの、器壁の厚さは1.3㎜を測り、口縁部内面に段をもつもの、口縁部はほぼ直立し、口縁端部は外傾する面をもつもの(163)がある。(163)は内面に布目痕が認められる。布目痕は1cmあたり12本の単位で認められる。胎土中にはスサ痕がある。

土錘(164)は1点出土している。直径は約4cm、残存厚2.6cmを測る。ほぼ中央に直径7㎜の円孔が焼成前に穿たれている。

埴輪は1点出土している。細片の上、全体に磨滅が著しいため、調整は観察できない。タガの状況も幅が約1.3cmあるとわかる以外、観察できない。

塼は同心円のタタキ目文をもつ須恵器製のものである。タタキ目文の原体は2種類認められる。(165)の原体は直径約8cmを測り、約13重の同心円が認められる。タタキ目の下には布目痕があるが、布目痕は1cmあたり13本の単位で認められる。焼成は甘く、軟質である。(166)

の原体は直径約5.8cmを測り、約８重の同心円が認められる。片側はタタキ目の下に布目痕が認められるが、もう一方はなで消したのか、布目痕が認められない。タタキ目の下の布目痕は１cmあたり６本の単位で認められる。端面は削り調整が施されている。なお、布目痕のある面には最後に約１㎜幅の区画用の沈線が１本引かれている。あと１点は残存状態が悪く、十分観察できないが、タタキの原体は(166)のものと類似する。　　(栗田)

## ４．まとめ

今回の調査で、古代末～中世にかけての遺構が多く検出されたが、残念なことに遺構の性格のわかるものはほとんどなかった。そんな中にあってピット１、ピット３、ピット４に見られる土師器皿Ａの集積は建物の地鎮を暗示させ、調査地周辺での集落の存在を証拠だてる重要な発見になった。

出土遺物の器種構成から見るとき、東播系の須恵器の鉢が包含層から１点しか出土していないことは重要である。遺構の所属時期が東播系の須恵器の流通が活発になる以前であることを示唆している。

瓦器椀はほとんど和泉型で、他に楠葉型のものが２点出土しているが、１％にも満たない。また、炭素の吸着の悪いものも多く出土している。瓦器椀は器高指数40の深い椀形を呈するものから、器高指数31程度の浅いものまで認められる。その中でも器高指数36～39程度で、深い椀形をしめしながらもヘラミガキの粗略化が始まった時期のものが最も多く出土している。それらの大半は外面のヘラケズリや横なでによって表面を平滑にしようと努力せず、指頭圧痕による凹凸を残したままにしている。ヘラミガキも外面から粗略化が始まり、ヘラミガキは高台付近までおよばず、体部の2/3程度で終わっている。また、施された部分であっても空白部の目立つものが多く認められるようになる。それでも内面はまだ、比較的空白部も目立つことなく密に施されている。ただし、ヘラミガキに方向性は認められず不規則なものが多く見られる。見込みのヘラミガキは平行線状、斜格子状もみられるが、やはり不規則な方向に施されたものが多くみられる。この他、溝１と土壙14－４から新しい時期の瓦器椀が出土している。とりわけ、土壙14－４から出土したものは断面三角形の高台が、0.25cmの高さしかなく退化がはじまっている。どちらも外面にはヘラミガキは認められず、器壁は薄い。なお、土壙14－４から出土したものは見込みに螺旋状のヘラミガキをもつ唯一の例である。

瓦器皿のヘラミガキは口縁部は横方向に施され、底部外面は平行状に、内面は平行状もしくは不規則な方向に施されるものが多い。そして、徐々にヘラミガキの範囲が少なくなり、外底面にヘラミガキが施されなくなるものまで見られるようになる。

黒色土器はＡ類の椀が多く出土している。Ｂ類も出土しているが、量は少ない。黒色土器生

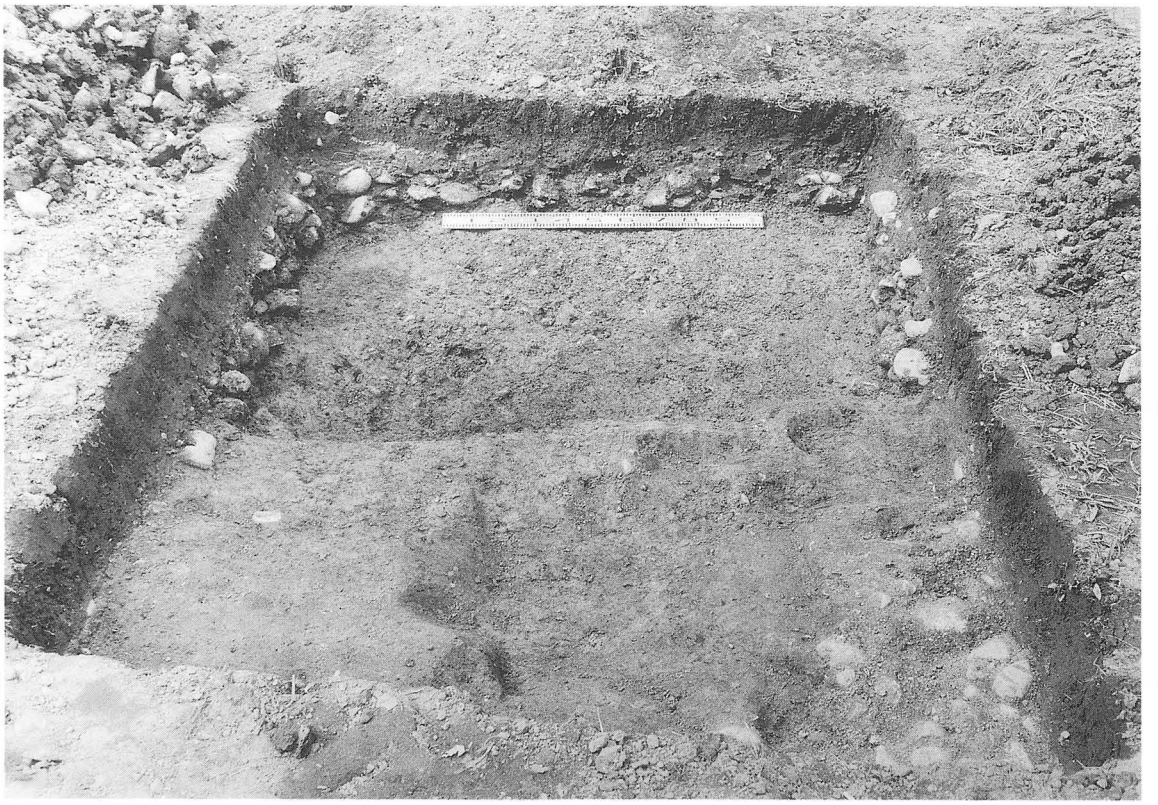
産の終わり方については南河内・和泉地域での在り方が、畿内中枢地域と同様でないことはすでに指摘されているが、今回の調査からもそのことが裏付けられている。すなわち、黒色土器A類→黒色土器B類→瓦器へと単純に移行せず、黒色土器が瓦器生産と並行して残存している可能性が強い。とりわけ、当地域において黒色土器のA類がB類よりも出土比率が多いという状況は必ずしも黒色土器B類を経て瓦器へ移行していないことを証拠づけている。ただし、出土した黒色土器の大半に口縁部内面に沈線のめぐるものが認められるという事実から、ただちに当地域のA類から瓦器に移行したということも断言できない。

土師器はピット1、ピット3、ピット4での皿Aの在り方が興味深い。ピット1、ピット3各々から出土した皿Aはそれらの胎土、調整の状況から一人の工人が一時期に作ったものであることがわかる。ピット4の皿Aの場合は同様の事実から複数の工人が一時期に作ったことがわかる。そしてそれらの出土状況を見るとき、さらに興味深いことがある。ピット1、ピット2の場合、その出土状況はまさしく埋納と言う表現がふさわしい。ところが、ピット4の場合、同じ埋納と言う意識があったにしてもその在り方に、若干、差異がある。すなわち、無造作に入れた皿の間には炭がぎっしりと詰められていた。これらの間にある製作、埋納の差異にどういう意識の違いがあるのかは興味深いところである。この他、特殊な製作技法で作られた土師器として回転台土師器が7点認められる。これらの大半が皿Aで、1点だけ皿Bが認められる。これらはすべて糸切りで、ヘラ切りのものは認められない。

この他、遺構の所属時期より古い時期の出土遺物の中には興味深いものが多く出土している。例えば、6世紀末～7世紀初頭の須恵器の甕の内面に「十」字のタタキ目文が認められるものがある。陶邑TG68号窯で確認されたものに類似する。このタイプと同じタタキ目文は富田林市内では中野遺跡でも出土している。これら両遺跡から出土した須恵器の一部はTG68号窯を供給元にしていると考えたい。この他、同心円タタキ目をもつ須恵器製の塼の出土は錦織細井廃寺の寺域の問題を考えさせる資料となる。また、製塩土器の中には生産地の違うものが出土している。内面に布目痕の認められる、かつて「六連式土器」と呼ばれた北部九州に多く出土する製塩土器の存在と、紀淡海峡産の製塩土器の存在は富田林市内ですでに出土している甲田南遺跡や中野遺跡と同じ搬入状況を示し、消費地での在り方、すなわち、塩の搬入が単一地域だけに限られていないという状況を示している。このことは、塩の消費に対する多様性を考えさせるとともに律令制下の地域国の枠をこえた流通の在り方というものを考えさせる資料となる。

（今西・粟田）

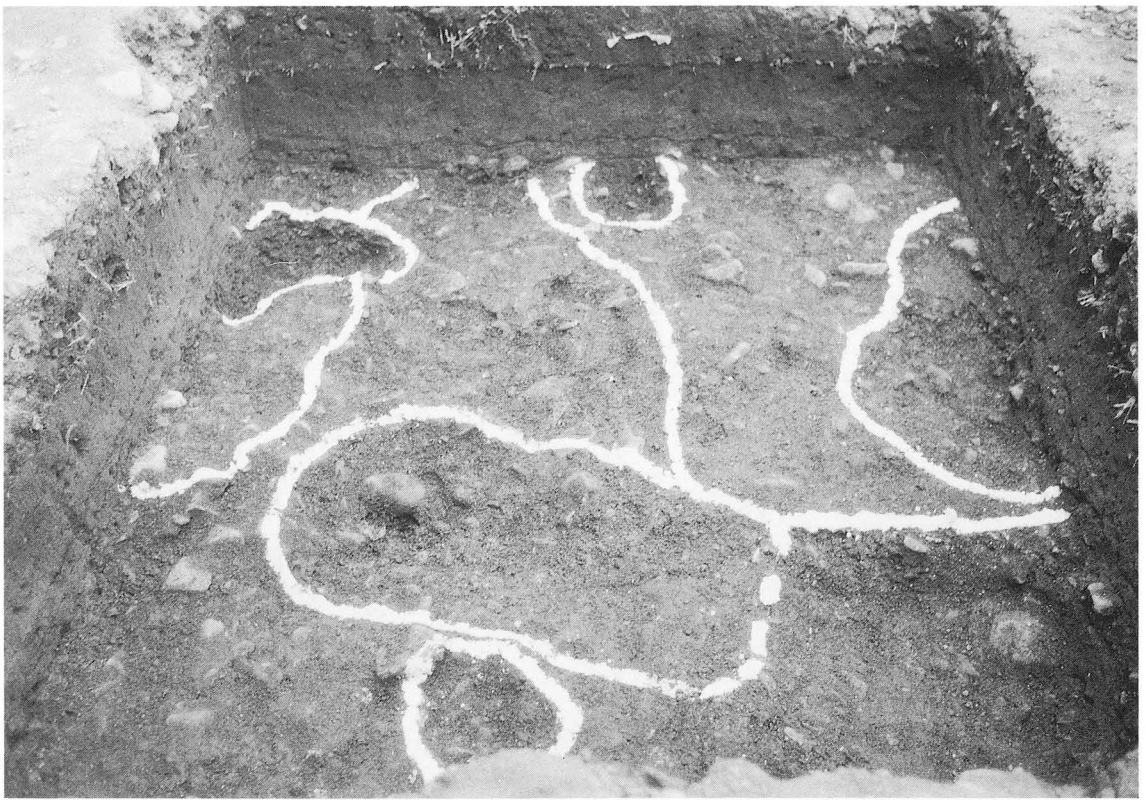
# 図　　版



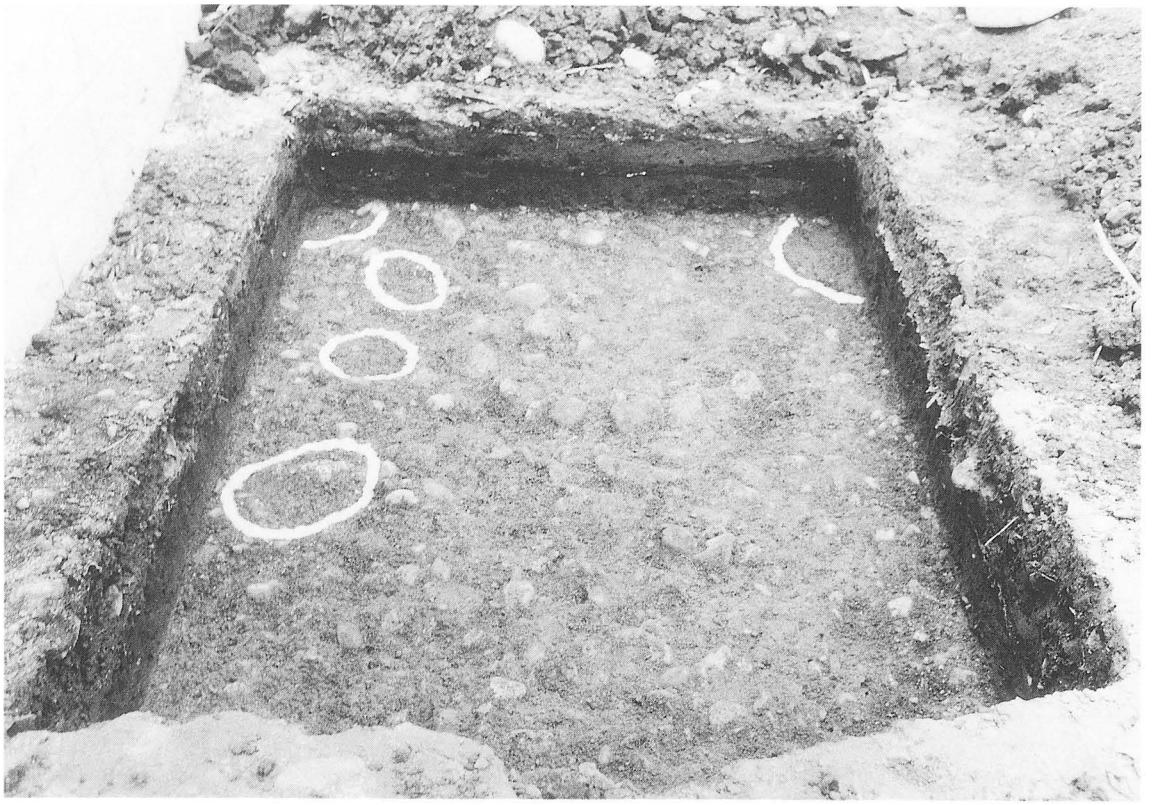
ＫＤ９２－１　調査区全景　南から

ＫＤ９２－１　溝１西断面　東から

ＫＤ９２－２　調査区全景　北東から

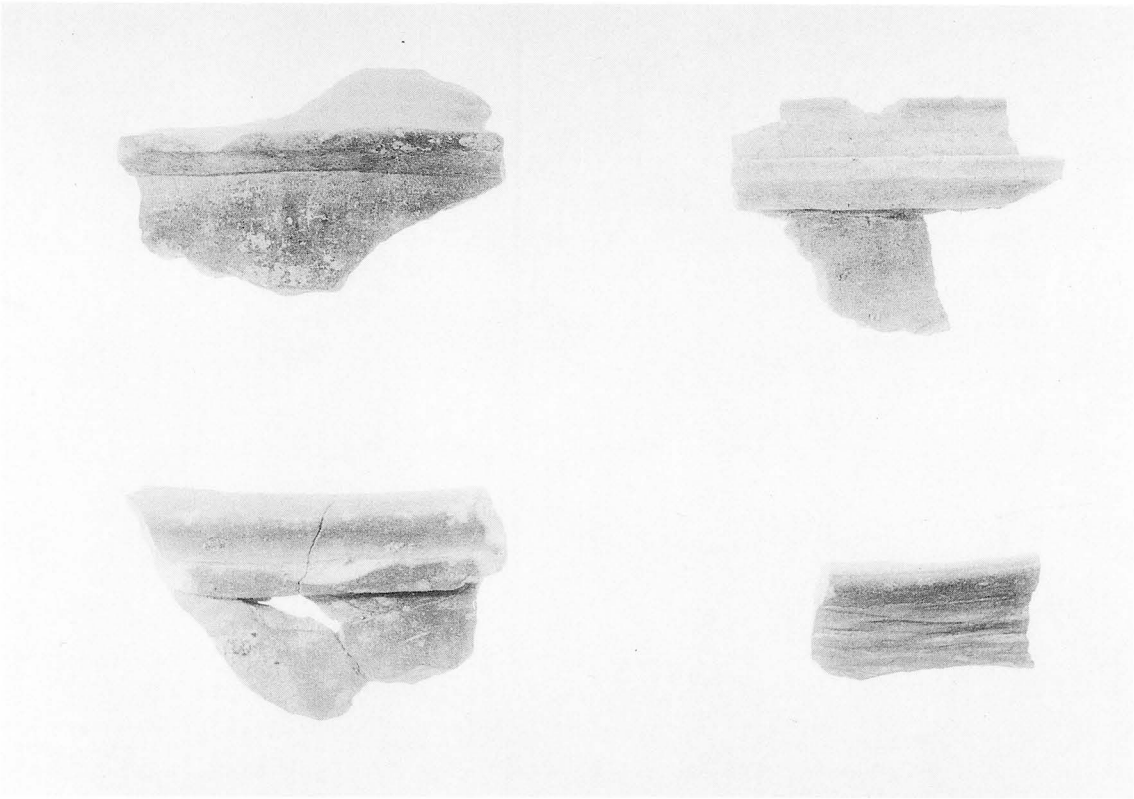


ＫＤ９２－３　調査区全景　北から

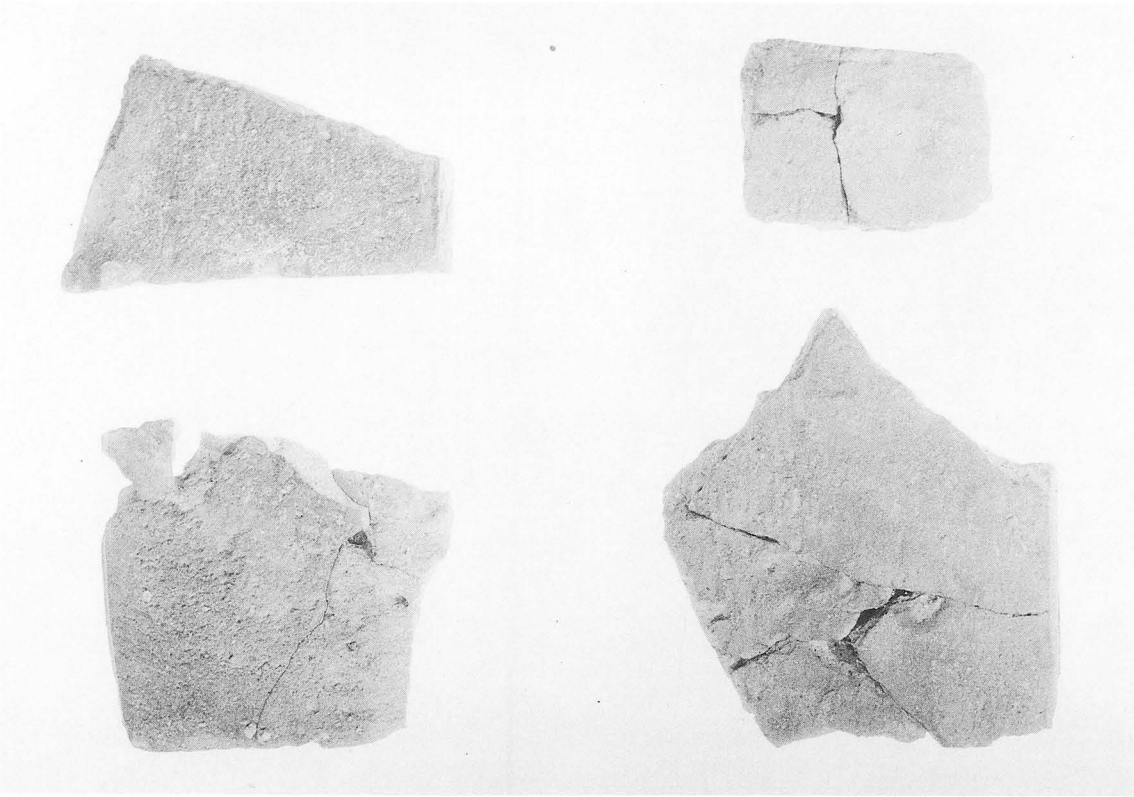


ＫＤ９２－４　調査区全景　北から

ＫＤ９２－５　調査区全景　北から



ＫＤ９２－２　土壙１出土土器

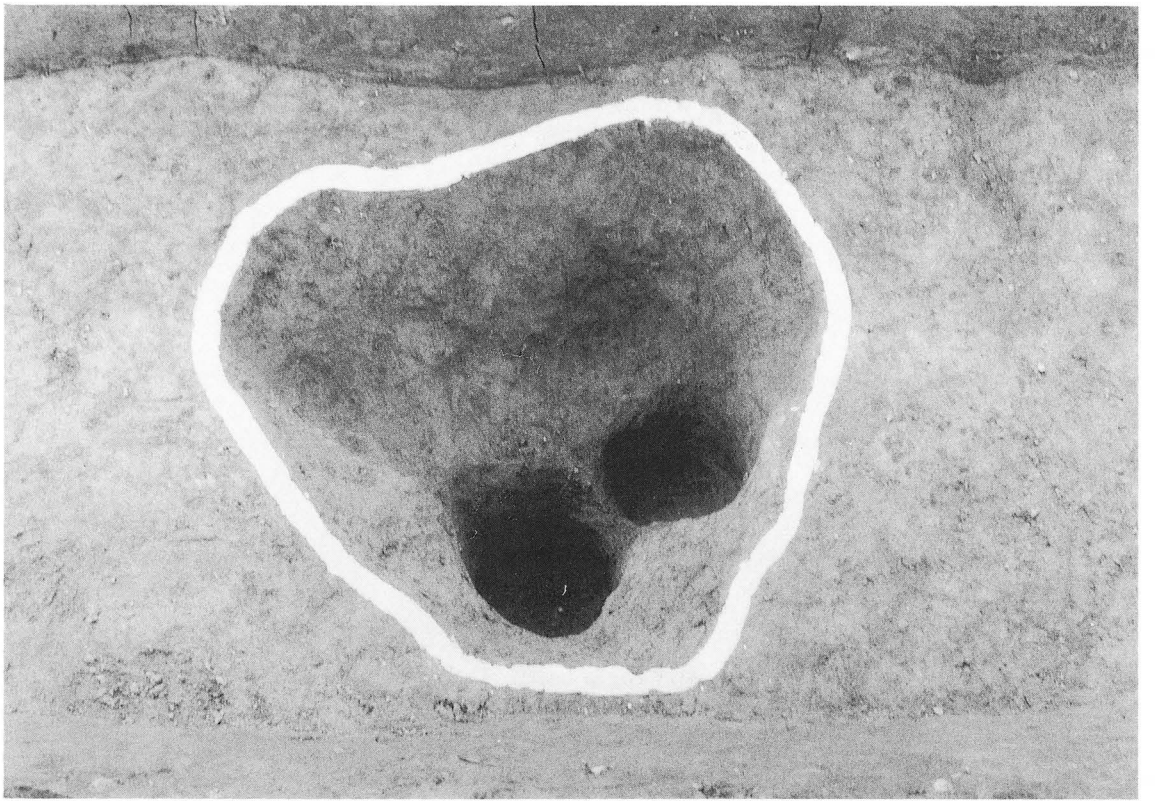


ＫＤ９２－２　土壙１出土瓦

ＫＤＳ９２－１　第１トレンチ全景　南から

ＫＤＳ９２－１　第１トレンチ　ピット９遺物出土状況　北から

ＫＤＳ９２－１　住居址１全景 南から

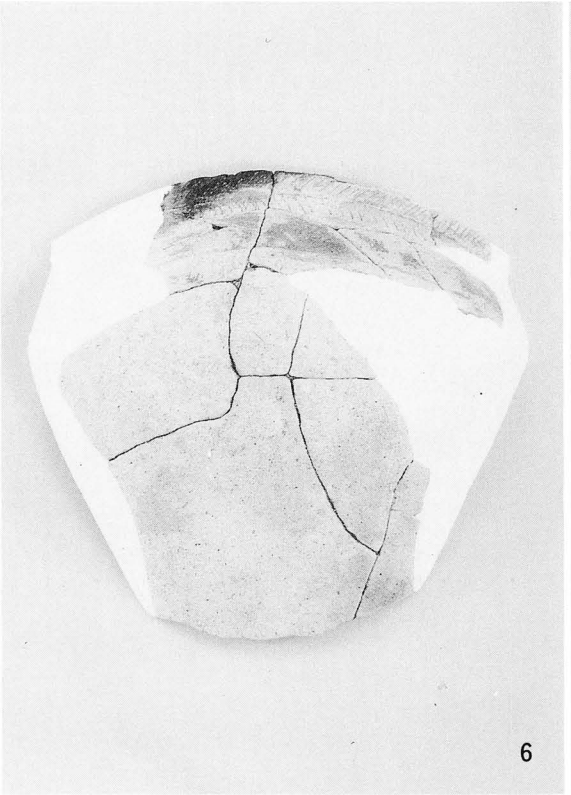


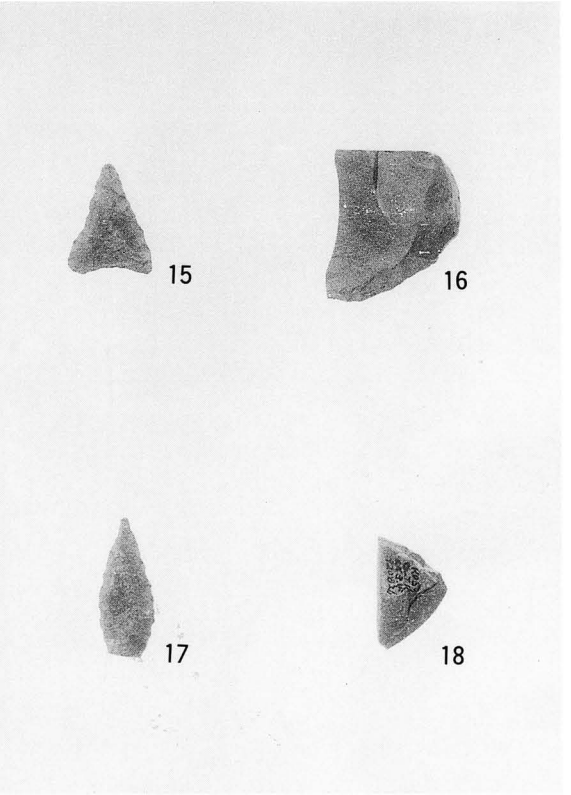
ＫＤＳ９２－１　住居址１内柱穴１　東から

ＫＤＳ９２－１　第２トレンチ東半部全景　東から

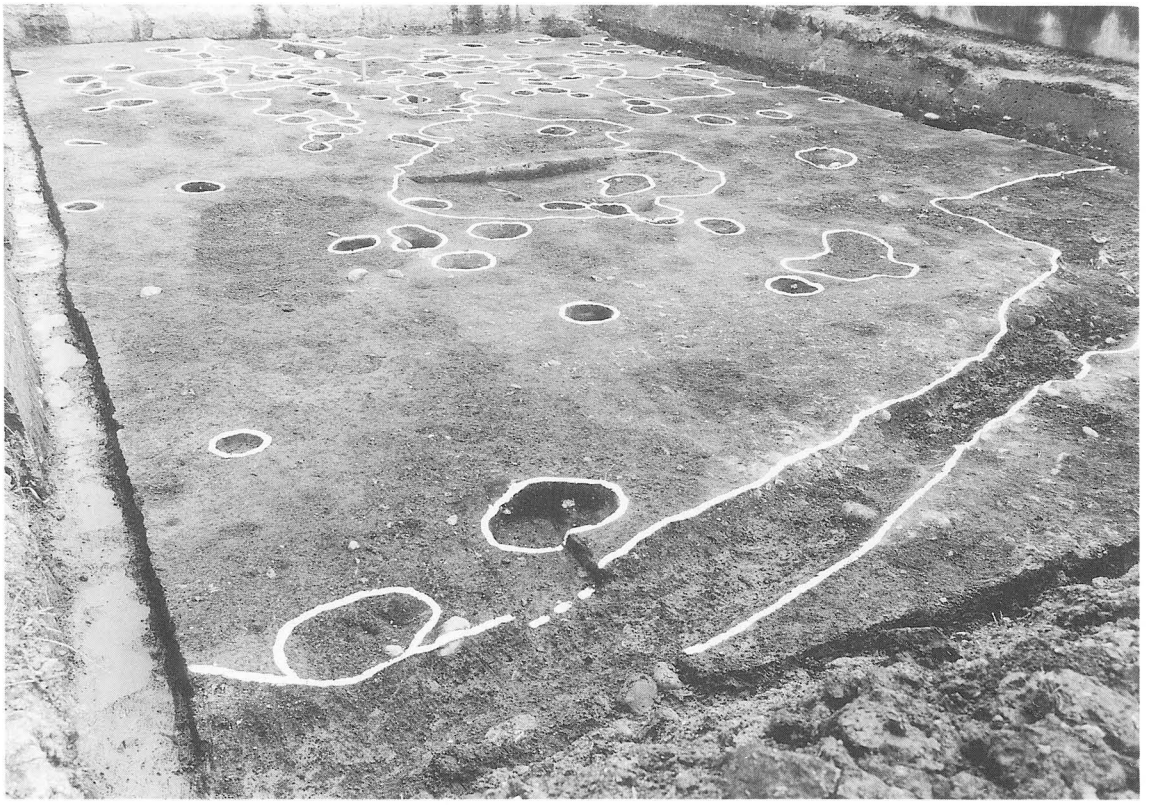
ＫＤＳ９２－１　第２トレンチ西半部全景　東から

ＫＤＳ９２－１　土壙１出土土器



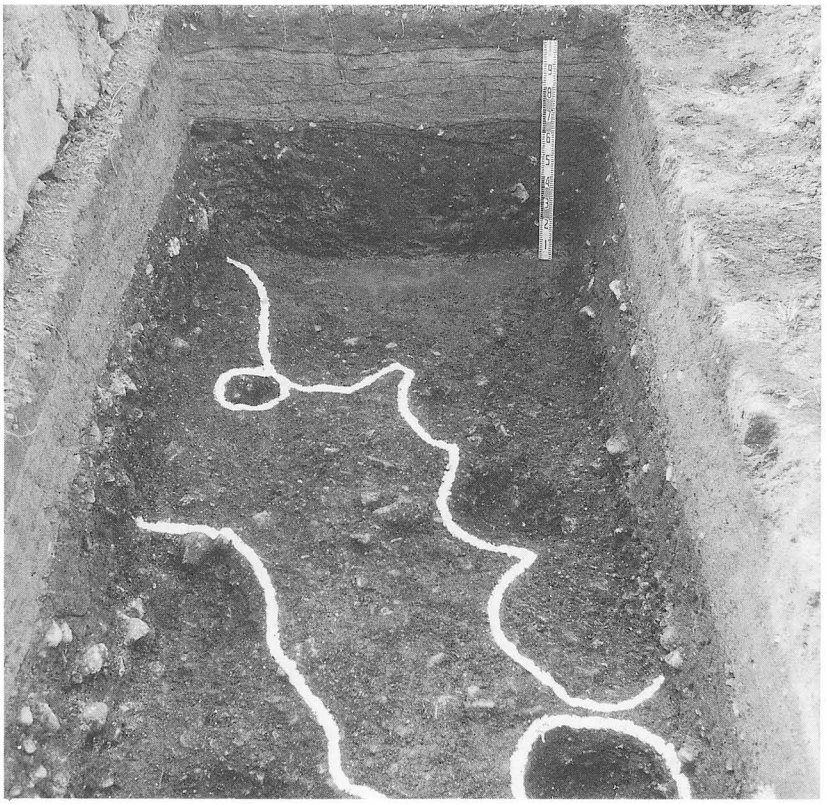




ＫＤＳ９２－１　住居址１・包含層出土遺物



ＮＫ９２　調査区全景　南西から

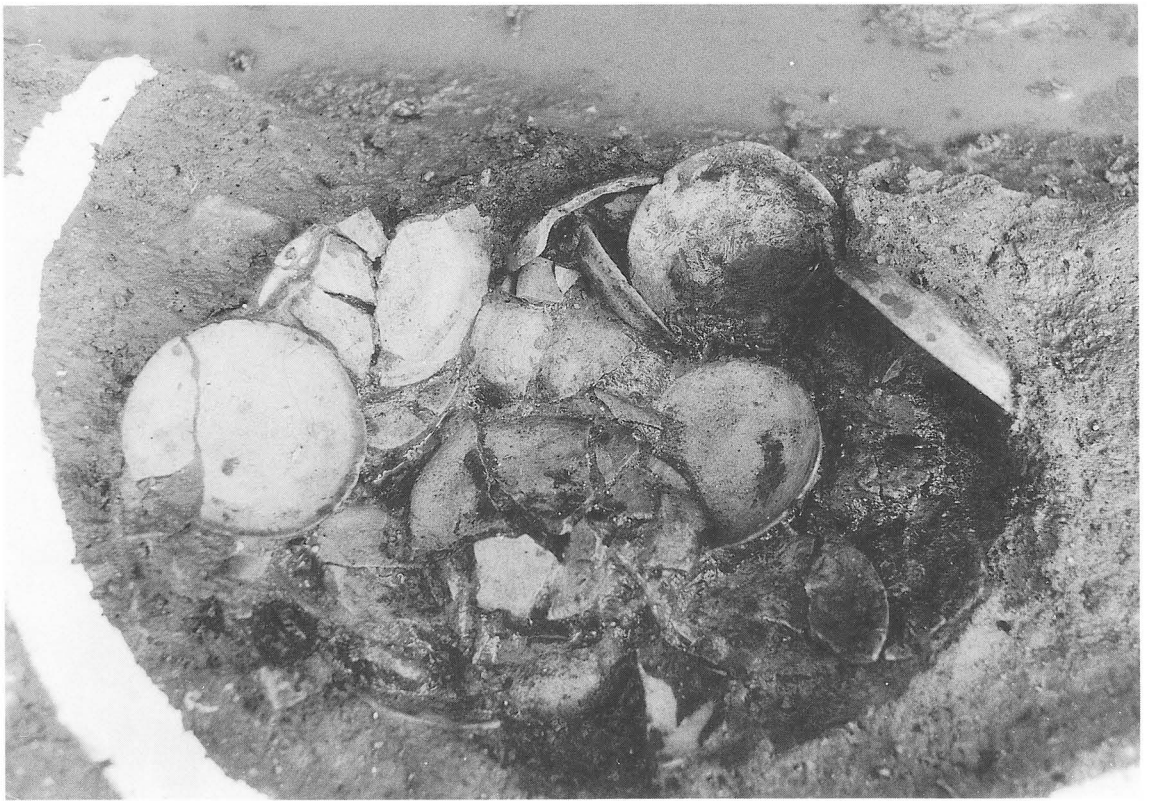
ＮＫ９２　調査区全景　北東から



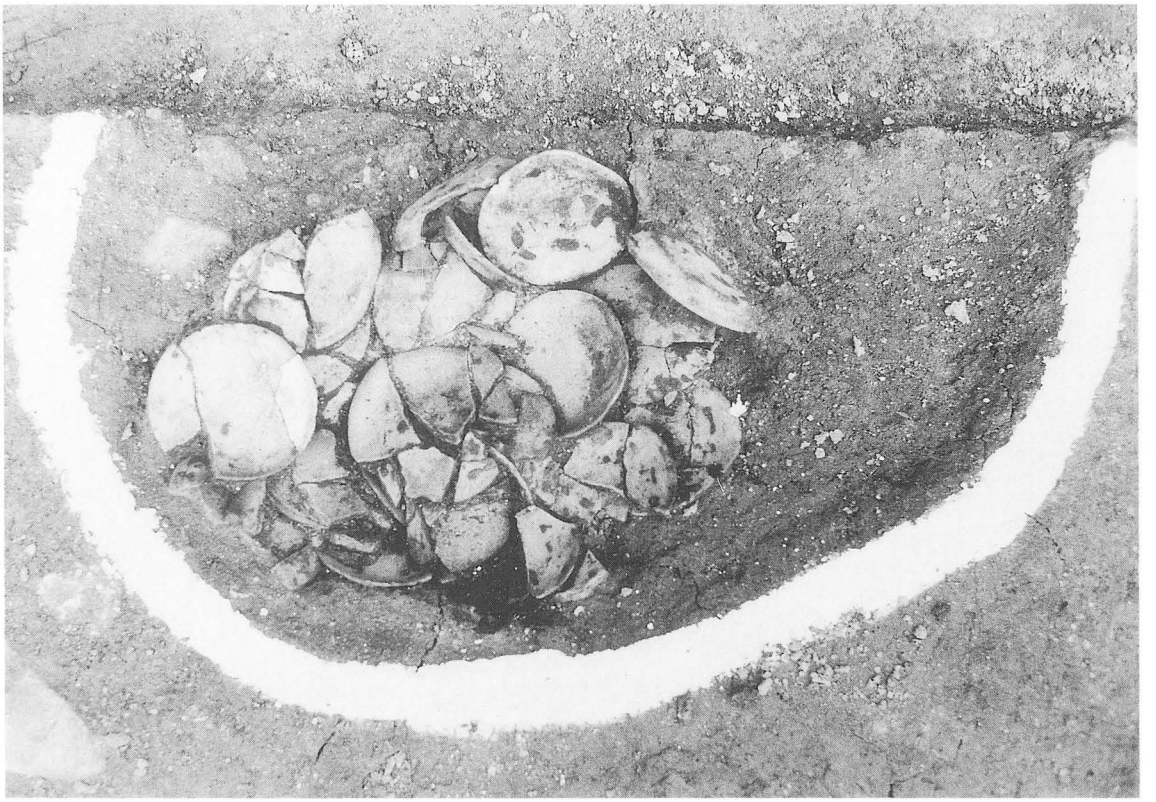
ＮＫ９２　トレンチ全景　東から

ＮＫ９２　ピット１遺物出土状況　東から

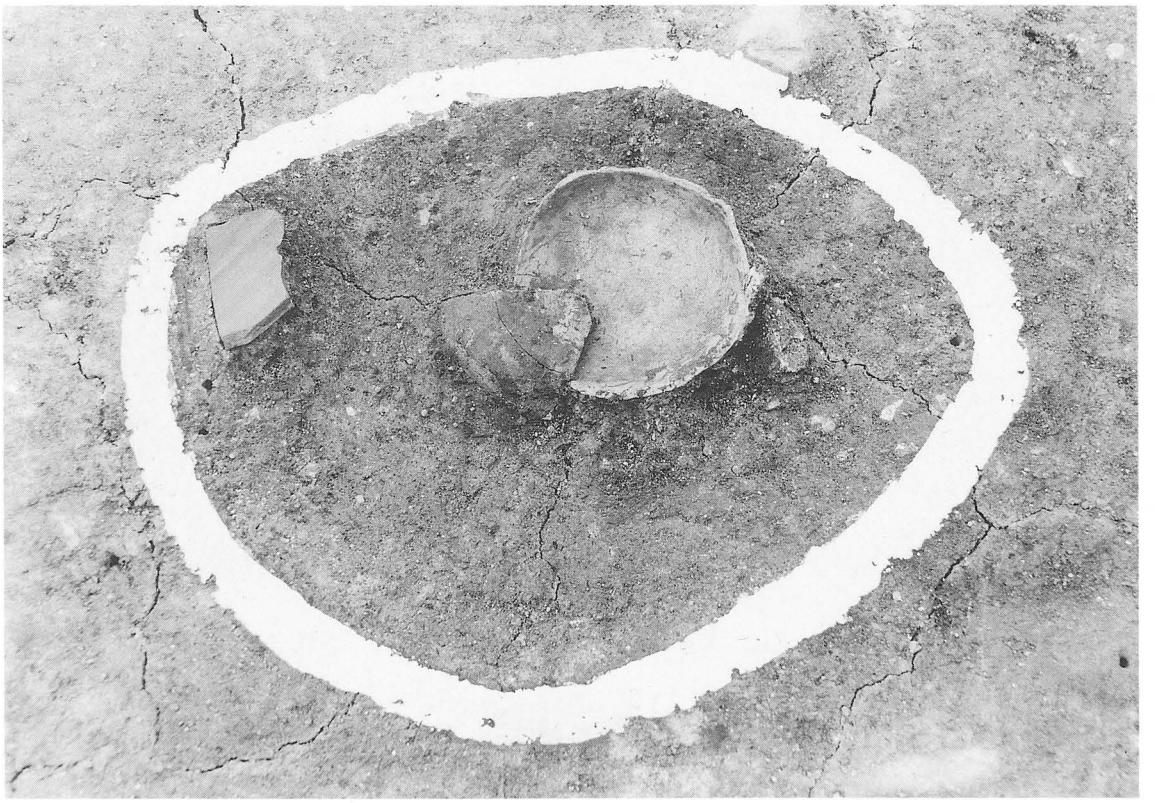
ＮＫ９２　ピット３遺物出土状況　東から



ＮＫ９２　ピット４遺物出土状況　西から

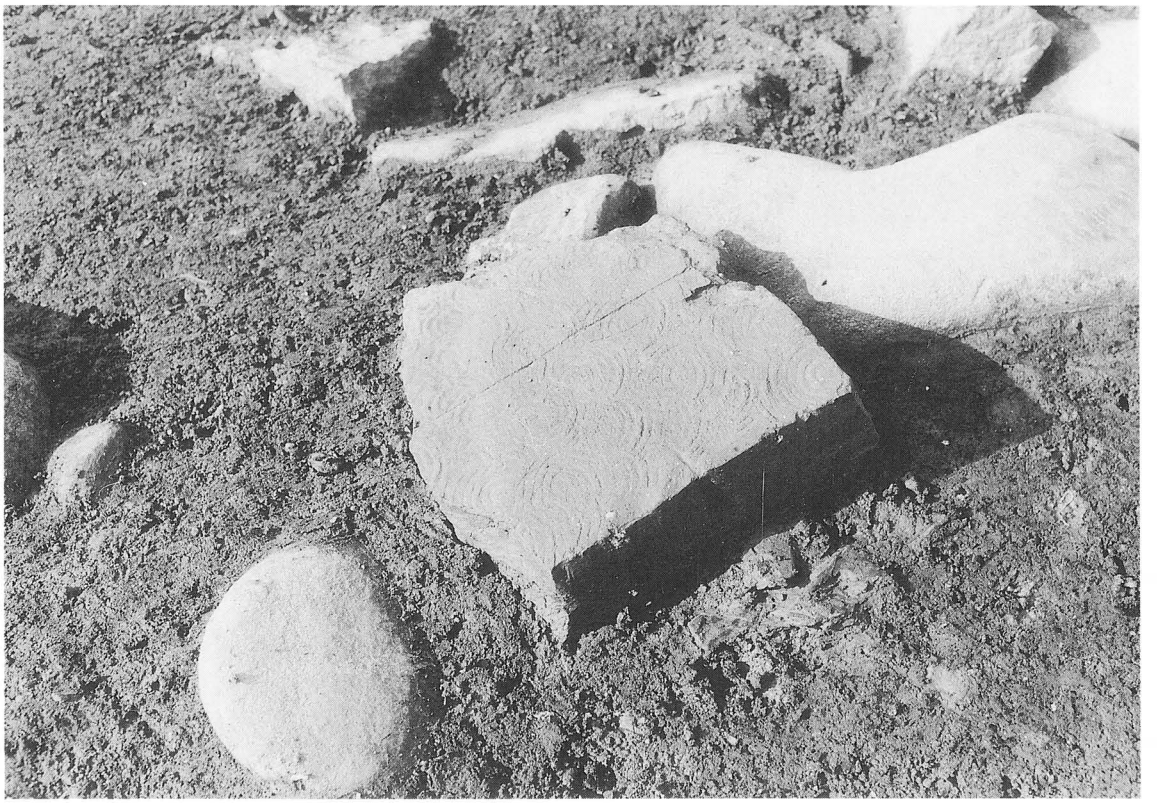


ＮＫ９２　ピット４遺物出土状況　西から



ＮＫ９２　ピット２遺物出土状況　東から

ＮＫ９２　包含層遺物出土状況　西から



ＮＫ９２　塼出土状況　東から

6

22

24

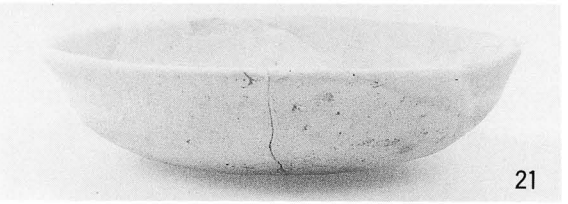
35

36

38

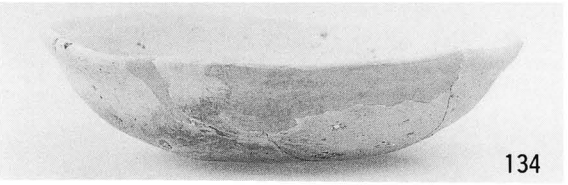
139

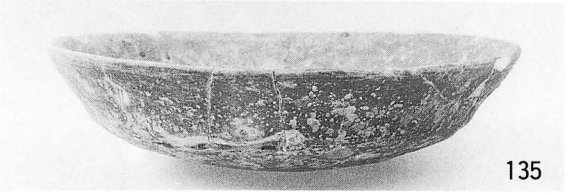
5


21

34

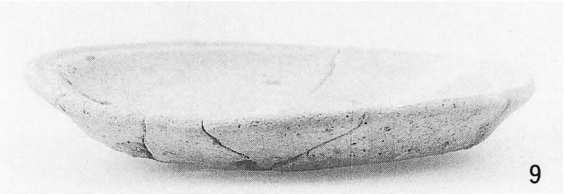
133

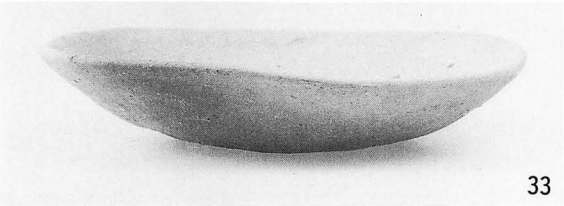

134

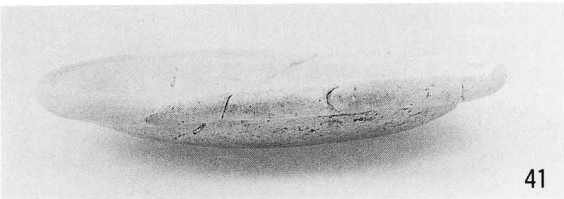

135

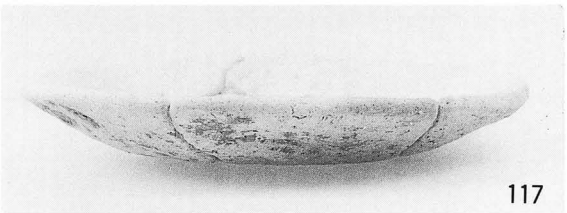
137

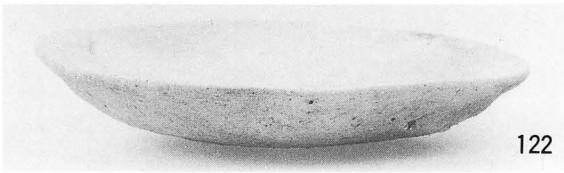
ＮＫ９２　出土遺物（瓦器椀・皿）

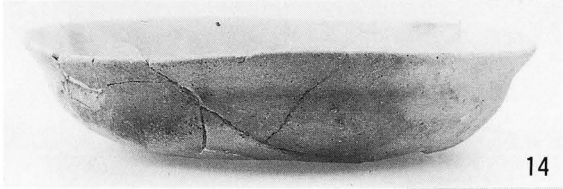


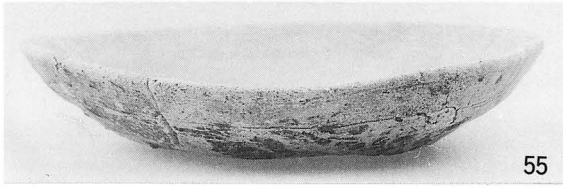


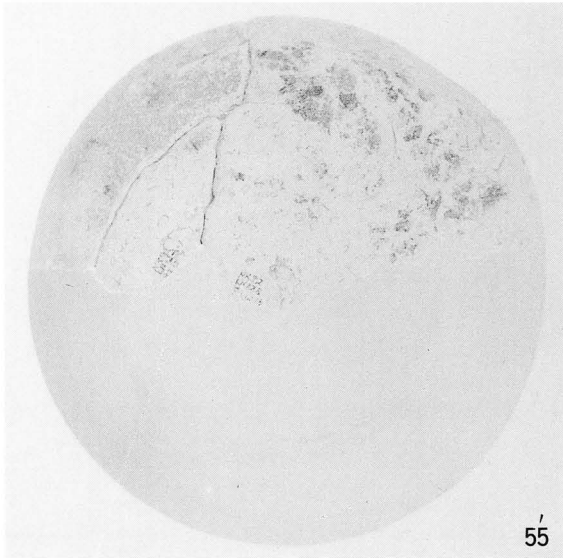



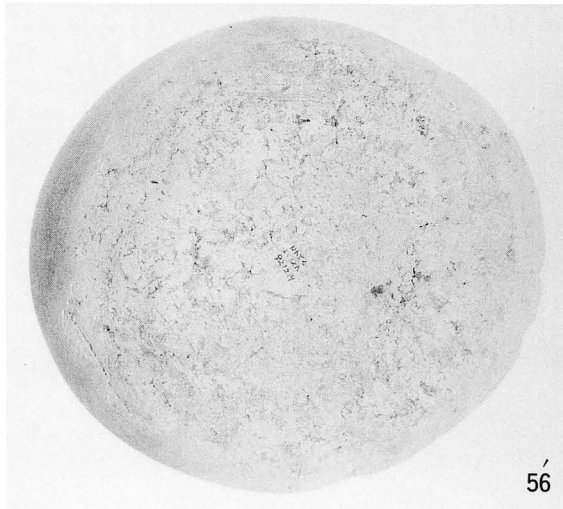





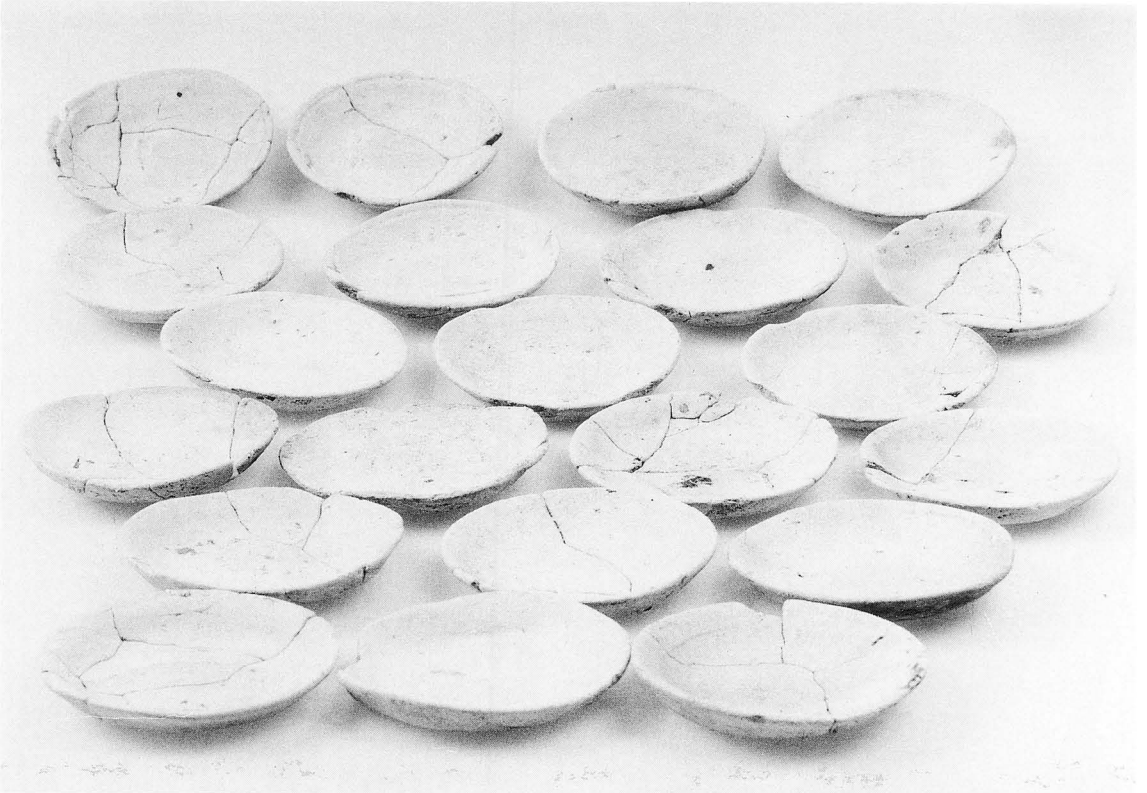





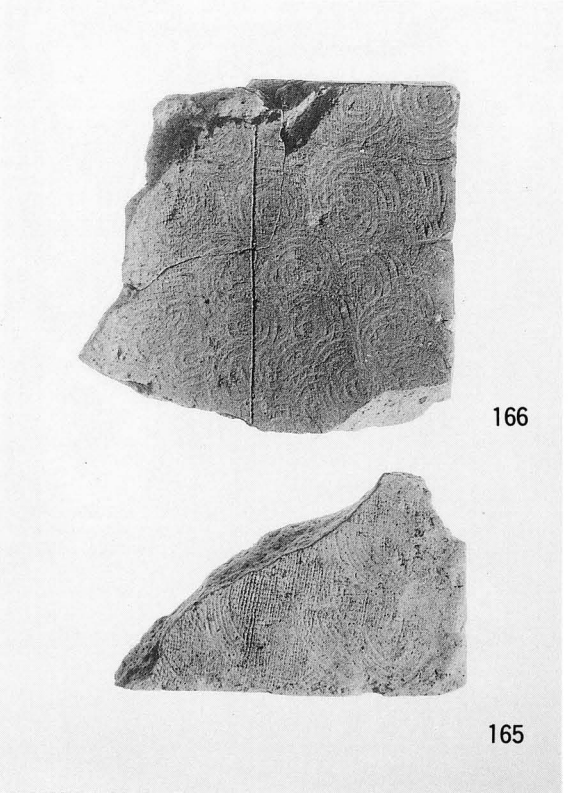

ＮＫ９２　出土遺物（土師器皿Ａ・Ｂ）

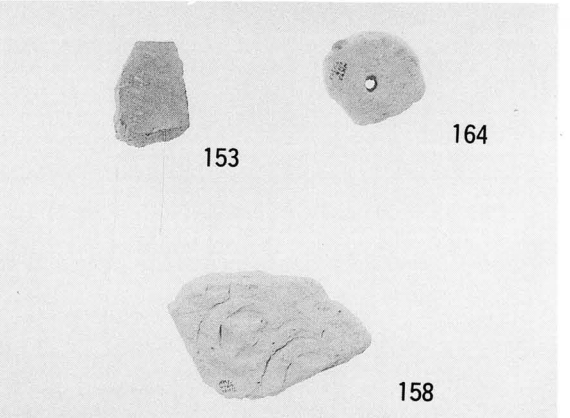
ＮＫ９２　ピット１出土土器（土師器皿Ａ）

ＮＫ９２　ピット３出土土器（土師器皿Ａ）



ＮＫ９２　ピット４出土土器（土師器皿Ａ）






ＮＫ９２　出土遺物（羽釜・直刃削器・土錘・須恵器甕・塼）

富田林市埋蔵文化財調査報告22

発行年月日　1993年３月31日
編集・発行　富田林市教育委員会
住　　所　富田林市常盤町１番１号
印　　刷　橋本印刷株式会社

1993．300